

ヤマ  
山 ん 家 遺 跡

緊急発掘調査報告書

1993年

新潟県横越村教育委員会

## 序

この調査報告書は、駒込地内の県道横越・新潟線改修工事に伴い、山ノ家遺跡・居浦郷遺跡を記録保存するために、平成4年5月から6月にかけて行われた発掘調査の記録であります。

駒込地内は、新潟平野に分布する3列の砂丘列のうち、もっとも内陸にある新砂丘Ⅰに立地し、早くから遺跡の宝庫と称されていたところであります。調査の結果、縄文中期、弥生中期、奈良・平安時代の土器・石器など多数が検出されました。また、奈良・平安時代と思われる素掘井戸状遺構と丸木井側型井戸が検出されるなど、大きな成果を収めることができました。

この調査によって得られた資料は、考古学的にも地域の歴史を知りえる上でも意義深いものであると考えています。この貴重な資料を学校教育・社会教育の場を通じて大いに活用し、先人が遺した文化的遺産として後世に伝えていきたいと思っています。

終わりに発掘調査と本報告書の執筆に当たられました川上貞雄先生からは、大変ご多忙のところにもかかわらず、快くお引受けいただいたことに、深く敬意と感謝を申し上げます。また、発掘作業に従事されました皆様にもその協力に心から御礼申し上げます。

平成5年2月

横越村教育委員会

教育長 中 川 国 保

## 例 言

1. 本書は新潟県中蒲原郡横越村における県道の拡幅改良工事作業に伴い、破壊が余儀ない周知の遺跡、「山ん家遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は新潟県教育庁による事前の確認調査結果に基づいて、横越村教育委員会が実施した。
3. 調査体制は次の如くである。

調査主体者 横越村教育委員会教育長 中川 国保  
調査担当者 川上 貞雄 (日本考古学協会々員)  
調査員 杉本 恵子  
佐藤 友子  
事務局 横越村公民館 泉沢 宏一 (館長・課長) 土村真喜雄 (係長)  
吉沢 正和 神田たかよ (専従)

4. 調査は1992年5月11日から同年6月6日までの発掘調査と、同年6月8日から7月25日までの整理作業をもって終了した。
5. 当遺跡はその大方が、過去に建設された県道と用水路建設工事によって大きく攪乱されていたが、弥生時代と古代(奈良・平安時代)との複合遺跡であることが判明した。
6. 本書の作成は調査員の他、田中順子の協力を得、執筆は川上が当たった。
7. 出土遺物に関して、石川日出志、増子正三両氏の御指導を得た。記して謝意を示す。
8. 整理作業に当っては、笹神村郷土資料館の準備室を借用させて戴いた。
9. 発掘調査参加者

和澄 鉄男 野崎 正男 菅井 春一 菅井ミツイ 晒名 秀男  
五十嵐秋雄 武藤仁一郎 鈴木 静雄 村木 恒 原 平吉  
遠藤 春一 内山 良典

## 凡 例

1. 遺物に対する挿図内の番号は、表番号及び図版写真内の番号と一致する。但し遺物番号ではない。
2. 図版写真内の番号で☆印の付くものは遺物番号である。
3. 遺物の実測図のうち、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器共に断面は白抜きであるが、文字で表示した。
4. 土器のうち、黒色土器及び、炭化物付着面の著しいものには、アミを被せて表示した。

# 目 次

I はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡確認調査結果概要	1
3. 発掘調査と整理事業経過	4
II 遺跡とその周辺	6
1. 遺跡の位置と環境	6
2. 周辺の遺跡分布	7
3. 発掘区の状況と土層序列	10
4. 古代の遺構	15
III 出土した遺物	19
1. 遺物の出土状況	19
2. 遺物の概要	19
A 縄文土器    B 弥生土器    C 石器    D 古代の遺物	19
IV まとめ	37
1. 各時代の遺物について	37
2. おわりに	39
参考文献	40
写真図版	41

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

当遺跡は横越村大字駒込集落の南西部大半を占めると推定される広範囲に亘る遺跡と考えられる。かつて1973年に記録された調査カードによれば、「昭和43年、砂取りで全壊」とあり、集落南西部の砂丘上にその中心部が存在していたものであろう。その後、より比高差の下の現在の集落内にも遺跡が広がっていることが知られる様になった。

この広がり的一部分と推定される位置に、県道横越・新潟線が走っている。この道路は、旧国道49号線、最新の亀田バイパス等と平行して新潟市、あるいは国道7号線に接続するための主要道路である。このため新潟県土木事務所によって大方の拡幅改良工事が進められて来た。いわゆる「横越・新潟線特殊改良第一種事業」工事である。

この路線が当遺跡の広がりに関わりがあるかどうか、また隣接して存在する「居浦郷遺跡」との関わりの有無を知るため、事前の調査、即ち遺跡確認調査が必要となった。1989年10月横越村教育委員会は新潟県教育庁文化行政課に依頼して実施した。その結果報告の概要は次項に掲載させて戴く。但し添付図等は省略した。

この確認調査の結果、山ん家遺跡は全面の発掘調査が必要となった。翌1990年発掘調査の計画が出来、予算計上も調うたが、諸般の都合上、発掘調査が実施出来たのは1992年5月となった。

## 2. 遺跡確認調査結果概要

### A 調査の目的

県道横越・新潟線拡幅工事が周知の山ん家・居浦郷遺跡にかかるため事前に調査をし遺構・遺物の有無、規模等を把握して今後の遺跡の取扱い資料とする。

### B 調査地点の所在と立地

◇山ん家遺跡：横越村大字駒込字前郷3 1 2 他

◇居浦郷 " : " " 字居浦郷4 5 2 他

この2遺跡とも新潟平野に分布する3列の砂丘列のうち最も内陸にある新砂丘Iに分類される亀田砂丘前列に所在する。

### C 調査体制と調査期間

#### 1. 調査体制

調査主体	横越村教育委員会（教育長 中川国保）
事務局	泉沢 宏（横越村教育委員会社会教育課長）
調査担当	茂田井信彦（新潟県教育庁文化行政課文化財主事）
調査員	高橋 保雄（ " " ）

2. 調査期間 平成元年10月11日から10月18日  
 現場作業 10月11・12・13・16日  
 整理作業 10月17・18日

D 調査の概要

1. 調査方法

山ン家および居浦郷の2遺跡を含めた調査対象面積は、約5,170㎡で、その中に合計35か所のトレンチを地形を考慮し、又、調査可能な地区について任意に設定した。

トレンチ内の表土等の除去には、バックホーが入るところはバックホーを用い、そうでないところは人力で掘削した。同時に人力で遺構・遺物の検出、土層等の観察記録を行った。

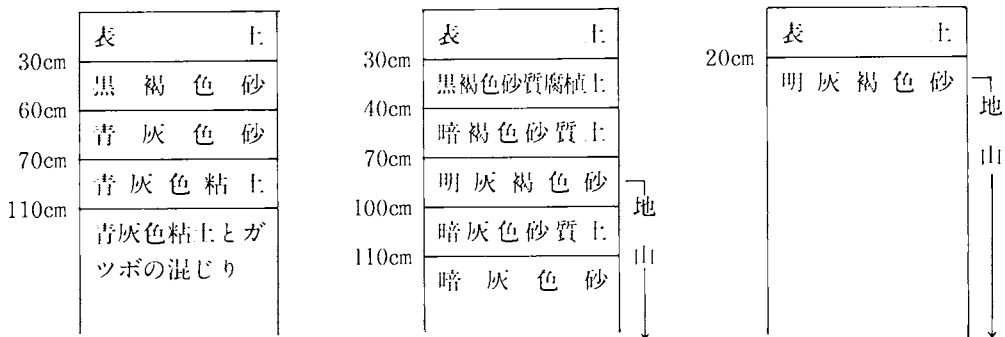
2 調査面積

- ◇調査対象面積 5,170㎡  
 ◇確認調査面積 288㎡ (試掘率、約5.6%)

3. 層 序 (別紙第2頁)

基本的には、大きく次の3つに分けられる。

- (A) 山ン家遺跡南側・居浦郷遺跡北側および山ン家・居浦郷の間 (湿地の所)  
 (B) 砂丘の部分  
 (C) 削平された部分



(A) 山ン家遺跡の南側・居浦郷遺跡の北側および山ン家と居浦郷の間、いわゆる湿地の部分。下層で粘土やガツボが検出され土層から湿地であったものと推定される。なお、居浦郷遺跡の北側は近年まで池が存在していたということである。

(B) 山ン家遺跡、いわゆる砂丘の部分。

砂丘上の土層であり2～3層から弥生土器・土師器・須恵器が検出され遺物包含層と考えられる。4層以下は無遺物層で地山と考えられる。

(C) 居浦郷遺跡、いわゆる削平された部分。

現表土の下からは、(B)で地山と推定したものと同一と考えられる砂が検出される。遺物包含層は認められない。昭和30年代に、この地域一帯は土取りされ、削平されたということである。

#### 4. 遺 構

11トレンチから土坑1基のみ検出されたが、出土遺物から近世以降と推定される(別冊写真No.15)。他のトレンチからは遺構は検出されなかった。

#### 5. 遺 物

35のトレンチのうち12のトレンチの遺物包含層から遺物が出土している。その内訳は、弥生土器47点、土師器195点、須恵器11点、近世以降の陶磁器と思われるもの45点、剥片2点、磨石1点、鉄滓11点、鉄片1点の合計313点である。

遺物は砂丘の南側斜面の山ン家遺跡から多く出土し、弥生土器はすべてこの部分からである。又、砂丘の頂上部分および北側斜面からも土師器・須恵器が検出された。いずれも地山面と考えられる層までは深く、遺物・遺構等の遺存状況は良好なものと考えられる。

#### E ま と め

##### 1. 山ン家遺跡について

山ン家遺跡は、県道横越・新潟線の東側に延びていて駒込墓所遺跡に連続するものと考えられる(昭和60年8月の詳細分布調査で確認)。

砂丘の頂上部、北側斜面については、山ン家遺跡が延びたのか駒込墓所遺跡が延びたのかは明確ではない。いずれにしる北側斜面まで遺跡は拡大しているものと考えられる。

土層の状況より現道路の下にも遺物包含層が存在しているものと考えられる。

##### 2. 居浦郷遺跡について

昭和30年代、多量に砂取りが行われ削平されている。この砂取りの行われた部分についての遺跡は壊されたものと思われる。

#### F 今後の取扱い

事前調査では、県道横越新潟線の現道路部分を除く、拡幅予定地の遺構、遺物の有無、規模等の確認調査を行ったが、下記の理由により現道路を含め改修計画予定地の全線を本格調査する必要があると考える。

- ① 山ン家遺跡、居浦郷遺跡から、弥生土器、土師器、須恵器等の遺物が313点検出されている。
- ② 両遺跡とも地山面と考えられる層まで深く、遺物等の遺存状況が良好なものと思われること。
- ③ 山ン家遺跡は駒込墓所に連続するものと考えられ、山ン家遺跡が延びたか、駒込遺跡が延びたか明確でなく、また、北側斜面まで遺跡が拡大しているものと考えられ、更に調査をする必要がある。

### 3. 発掘作業と整理作業経過

筆者等が当遺跡の発掘調査に関する打診を受けたのは1991年1月末日のことである。その当時筆者等はすでに1991年度の調査日程が充満し、当然のことながら調査をお断りした。後日になって1992年度での調査との打診があり、その時点で一応引受けることを諒承した。この長い空白の時間に他の担当者 の出現を願っていたことであつた。

1992年6月筆者等は前任の作業を中断し、当遺跡の発掘調査に掛つた。調査範囲は現状の道路の両側に及ぶものとはいえ、これまで図面上での検討では安易に考えていたが、実際の現地の状況は全く異なつた状況を呈していた。その第一は現状の道路が考えても見なかつた程の交通量があること、さらに対向車同志の擦違ひが容易ならざることである。第二は調査区域が道路面よりかなり低い位置にあるものと、その逆の区域があること等がある。第三は調査区域が狭いことで残土を総て他所へ搬出せねばならないことと、バックホー等の重機の施回が困難なこと、廃土運搬用のダンプカーが進入出来ないこと等々であつた。

調査はバックホーによる表土除去作業から始まるが、後述する調査区の最も幅員があるA区（第3図参照、10ページ）の一部から行つた。ここに使用したバックホーはバケツ容量0.4 m<sup>3</sup>1台、積載量4 tダンプカー1台である。廃土置場は2 km先の村有地である。次いでA区の一部及びD区の表土除去はミニバックホーに切り替えて行わざるを得なかつた。なおD区における作業は、建物等の移転跡であるため、建造物の基礎ブロック、古瓦等々の残材が多量を極めた。

表土排出後の掘削作業による排土は、A区域についてはベルトコンベアーを設置して集約し、搬出した。D区域での排土はミナなどで集約したものをミニバックホーで掻揚げ搬出する以外に方法はなかつた。

一方安全対策として県道に接する全面にバリケードを設置し、さらに安全燈を全面に設置した。一方D区は各所に民家の出入口があり、自動車の通路を確保した。第3図に示した未発掘部分がそれである。D区における確認調査結果では7片の土師器と3片の須恵器が報告されている。当調査においても縄文土器1片、弥生土器1片、須恵器1片が検出されているが、遺構の検出は皆無であつた。この結果第2次的調査を考えていた通路残存部分の調査を放棄した。なお第3図の④部分は亀田郷土地改良区が管理する地下水路の出口施設などがあるため、もとより調査は出来ない地域である。

C区においては、確認調査の結果2片の土師器、1片の須恵器が報告されているにとどまる。さらに第3図に⑤で示した部分は砂丘の削平地と推定されている。前記D区域での調査結果をふまえ、C区域の調査はD区域以上の多大な交通妨害を要すること、地元住人の営業活動を完全に停止させることなどから調査を断念した。

A区域の調査結果や確認調査結果から、B地域は確実に遺跡の範疇にあることは分る。然しながら調査範囲の幅員が3 mと狭く比較的深掘を要するこの遺跡では1 m幅を調査することが限度である。さらにその地点は確認調査で終了しているものと思われる。また第3図で⑥に示した部



分は駐車場入口に面するため調査を断念した。

A区域のうち第3図①部分は遺跡の範疇には当たらないとのことで当初より除外地とされていた。②は廃土集約土兼搬出積込用地として確保し最終調査の予定にしていたが、これに接する部分、即ち第6図グリットの5～6ライン以南は砂取りによってすでに破壊が進んでいたため、この地域の調査を放棄した。③部分は地形的に窪地であり、さらに前記の用水路作成によって破壊が進んでいることが見られるため調査を除外した。

以上のことから発掘調査範囲は第3図に示した予定地内のうち太線で囲んだ地点のみにとどまった。調査の結果は確認調査結果とは異なり、遺跡の末端部であること、大部分が破壊されていること、遺物出土層（いわゆる遺物包含層）もほとんどが攪乱層であった。遺構としては古代の井戸遺構が唯一のものであった。

現地の本部兼休息所として近くの集落センターである駒込会館を使用させて戴き、器材収納場所として志田清一郎氏の作業棟を借用した。また前記表土除去作業、安全施設等については有限会社佐藤組の協力を得た。その他調査中の残土運搬には和澄策男氏所有の2tダンプカーの借用を受けた。記して謝意を示す。

現地調査に引続いて整理作業を行った。整理作業は笹神村郷土資料館の一室を借用した。現地での実測図の整理、土器の注記作業、復元作業、分類、実測、撮影、さらに報告書作成へ向けてのトレース、割付作業に要した日数は38日間、延人員150人であった。

## II 遺跡とその周辺

### 1. 遺跡の位置と環境

横越村は新潟平野のほぼ中央部に位置する。村の東側は大きく蛇行する阿賀野川に遮られているが、北蒲原郡の豊栄市、京ヶ瀬村に接し、南側も小阿賀野川を境にして新津市に接する。北及び北西部は俗に山通りなどと呼ばれる低砂丘を以って新潟市、亀田町にそれぞれ接している。このような地形のもとで現在では所謂低湿地帯に俗するが肥沃な大地である。

山ん家遺跡は村の北側に当る大字駒込字前郷 477 番地を中心にして所在する。ここは北側の新潟市、西側の亀田町に隣接している。遺跡の立地は砂丘地に当る。これは新潟平野の最も内陸部に所在する日本海砂丘である。

第1図は新潟平野の内陸部に於ける古い砂丘を知る上で入手出来た昭和31年修正による地形図に砂丘部分に太線で加筆したものである。★印で示した位置が当遺跡である。

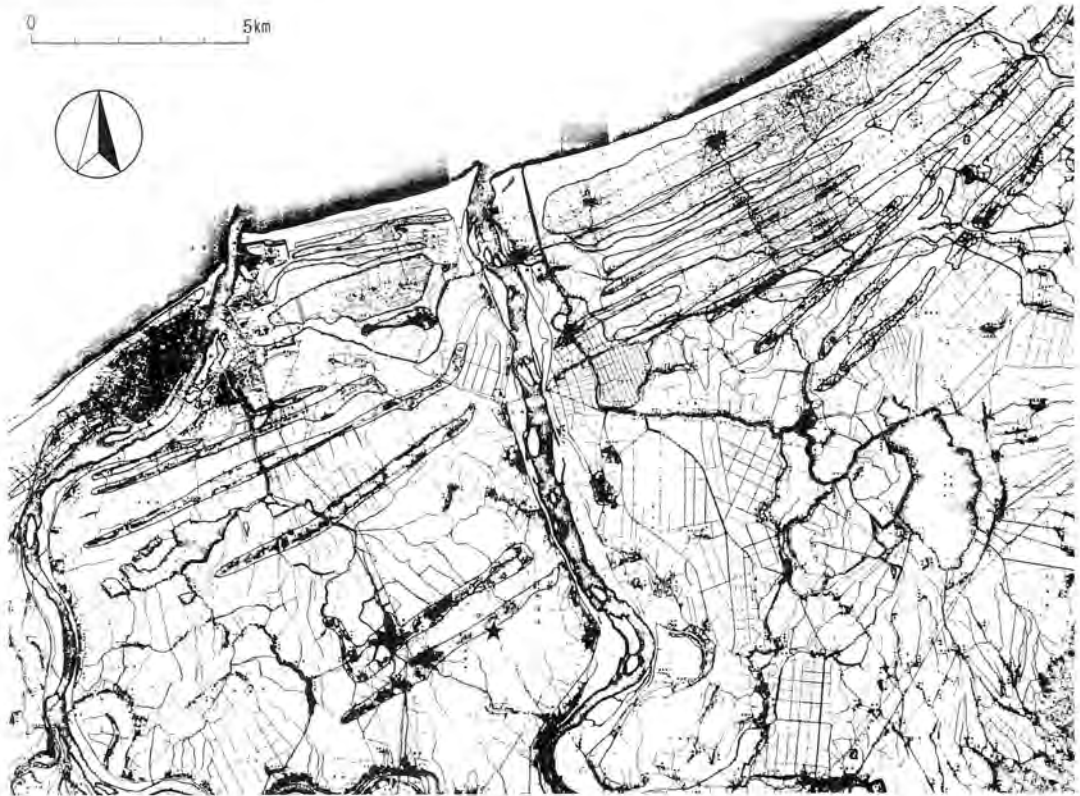
この最も内陸部に位置する砂丘列は、茅野山、日水、城所、所島、砂崩(亀田町)、駒込、藤山、平山(横越村)、笹山(新潟市)に連なるものである。阿賀野川東部の豊栄市の一部分では、第1図に見る限り、すでに農地の土地改良事業が進み、砂丘の連なりは不明だが、土地改良事業による削平と見るよりは阿賀野川の河口によって砂の堆積が無かったものであろう。その東側は法花鳥屋、黒山(豊栄市)、佐々木(新発田市)、山三賀、諏訪山(聖籠町)へと連なる。これが第I砂丘群の前例に当るものである。

第II砂丘群は新潟市鳥屋野潟南側の長潟、石山、岡山(新潟市)、阿賀野川東側の下山、見国山(豊栄市)を経て甚兵衛橋、二ツ山(聖籠町)に連る数条の砂丘列である。ちなみに第III砂丘群は最も大規模のもので現在の海岸線にほぼ平行して発達している。西側の五十嵐、関屋、松崎太夫浜、鳥見浜、太郎代(新潟市)、亀塚浜、網代浜(聖籠町)へと連なる。第1図の範疇にはないが、西は角田浜、越前浜(巻町)まで連っていることはいうまでもない。

これらの砂丘上に立地する遺跡の分布は砂丘の成立を知ることによって自然科学の上で利用されるところである。縄文時代の遺跡が所在するのは主に第I砂丘群、第II砂丘群にかぎられる。この内最も海岸寄のものに横土居B遺跡、笹山A遺跡(豊栄町)があり、共に第II群最後列南側に位置する。第III砂丘群には当然の如くより時代の降った遺跡となる。東港亀塚遺跡(聖籠町)、東港太郎代遺跡(新潟市)は共に古墳時代の製塩遺跡である。その他多くの遺跡が点在するが、奈良・平安時代の遺跡である。

当遺跡が所在する第I群の前例は西へ弓状につながると、巻町上堰潟南の布目集落の浜堤(波によって打ち上げられた砂礫が海岸線と平行するように堆積した高まりの地形)につながる。この布目集落付近に位置する布目遺跡は縄文前期(約6,000~5,000年前)のものである。一方当遺跡に隣接する砂崩遺跡(亀田町)、小丸山遺跡からは縄文中期(約5,000~4,000年前)の土器

が出土している。この砂丘は後列に於ける砂丘列間の凹地に於ける泥炭層の堆積速度の計算から130,000～4,300年以前には形成していたといわれる。少なくとも縄文中期以前にはすでに形成されていたものである。遺跡はこの砂丘列南側に位置し、昔時は東側の凹地に向った斜面に立地していたものと推定される。



第1図 遺跡周辺の地形図

## 2. 周辺の遺跡分布

山ん家遺跡が営まれた新砂丘第I群に属す最内陸部に位置する砂丘の内、特に亀田町地域の砂丘・砂堆列は前後二列が認められている。当遺跡が所在する前列（内陸部）の位置は前項に記述したが、亀田地域に残る後列の砂丘は四ツ興野、手代山、北山、丸山、直山に至るもので、前列の砂丘と約300～600mの凹地を有して平行に並んでいる。

この二列の砂丘上に所在する遺跡は他の地域に比較して驚く程多い。第2図は亀田地域に於ける第I群砂丘列とその周辺に分布する遺跡である。筆者等は土地不案内のため、或いは欠落のものもあるかも知れないが御容赦願いたい。ここに示した遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代（奈良・平安時代）そして中世（鎌倉～室町時代）の遺跡である。この図で見る限り遺跡の所在は砂丘前列に集中するかに見られるが、後列は住宅密集地帯であり、近年での遺跡発見は非常に困難である。また一方ではその南側地域に砂取り事業の進んだ様子が見られることなどから



第2図 遺跡と周辺の遺跡分布図

周辺の遺跡一覧表

	遺跡名	所在地	時代	遺物	備考
1	鶴ノ子	亀田町字腰廻り574～576	平	土師器、須恵器	
2	下西	泥瀉字下西	古	〃	
3	泥瀉	〃	(平)	須恵器	
4	早通前	茅野山字早通前	平、鎌	土師器、須恵器、中世陶器	
5	西前郷	〃 〃 字西前郷	縄、奈、平	縄文(後)、土師器、須恵器	
6	市助裏	舟戸山3丁目723	(平)、(鎌)	羽口、鉄滓、鉄片、木炭	
7	川西	〃 〃 5丁目331-1	平	土師器	
8	八幡山	〃	奈、平	須恵器	
9	貝塚	元町5丁目189-1、他	〃	土師器、須恵器	
10	手代山	茅野山字漏漏2793	(平)、(鎌)	須恵器、中世陶器	
11	中ノ山	城山	奈、平、鎌	土師器、須恵器、中世陶器、井戸	1981年発掘調査
12	荒木前	〃 〃 1丁目	奈、平、鎌～室	須恵器、他	
13	日水	茅野山字日水浦2911、他	奈、平	土師器、須恵器	
14	手代山排水路	〃 〃 字竹ノ花2232	古	〃	
15	養海山	〃 〃 字大倉		鉄鏝、鉄滓	
16	八幡前	茅野山	平	土師器、須恵器	
17	武左衛門裏	〃 〃 字竹ノ花2336	古	〃	
18	栄徳寺裏	〃 〃 字日水南492、他	縄、奈、平、中世	縄文(後)、土師器、須恵器、中世陶器	
19	手道	城山甲字手道	平	土師器、須恵器	
20	城山	城山4丁目1025-1、他	縄、弥、奈、平	縄文(中)、弥生(中)、土師器、須恵器	
21	斉助山	〃 〃 〃 1127、他	〃 〃 〃 〃	縄文、弥生、土師器、須恵器	
22	三王山	〃 所島1丁目780～790	平～室	須恵器、陶磁器	1979年発掘調査
23	茨島	袋津字茨島	平	〃	
24	岡田	城山字岡田	〃	土師器、須恵器	
25	上沼	袋津字上沼	奈、平	〃	
26	川根谷地	横越村横越字川根谷内	(平)	〃	
27	砂岡	亀田町字袋津	平	〃	
28	上ノ山	砂崩字上ノ山344	奈、平	須恵器	
29	三條岡	砂崩字三條岡	〃、〃	土師器、須恵器	
30	塚ノ山	袋津字塚ノ山	平、近	〃 〃 近世陶器	
31	向山	〃 字向山5110		石鏝	
32	前山	新潟市北山字前山341	奈、平	土師器、須恵器	1986年試掘調査
33	丸山	〃 丸山	平	〃	
34	彦七山	〃 〃 字前郷262	奈、平	〃 〃 土鏝	
35	金塚山	〃 〃 字金塚131	〃、〃	〃	
36	浦ノ山	亀田町砂崩字浦ノ山244	平	〃 〃 石鏝	
37	砂崩	〃 〃 字浦郷307、他	縄、奈、平	縄文(中)土師器、須恵器	
38	迎山	〃 〃 字迎山	〃、平、室	縄文(中、晩)、土師器、須恵器、青磁	
39	前郷	横越村駒込字前郷290、他	縄、弥、平	縄文(晩)弥生(後)、土師器、須恵器	
40	駒込鼻所	〃 〃 〃 546、他	平	土師器、須恵器	
41	小丸山	〃 〃 〃 243	縄、平	縄文(中)、土師器、須恵器	1981年発掘調査
42	居浦郷	〃 駒込字居浦郷	奈、平	土師器、須恵器	
43	丸山	新潟市丸山字前郷472、他	平	土師器、須恵器	
44	茗荷谷	新潟市茗荷谷字伝次山466-1、他	奈、平	〃	1972年発掘調査
45	藤山	横越村勝山	(平)(中)	〃 〃 中世陶器	
46	笹山前	新潟市蔵岡字笹山前126、他	縄、弥、平	縄文(後)、弥生(後)、土師器、須恵器	
47	神明社裏	〃 笹山203	平	土師器、須恵器	
48	城山	〃 蔵岡字城山219	〃、鎌	〃 〃 中世陶器	
49	中山	〃 〃 字上境168	縄、平	縄文(後)、土師器、須恵器	
50	江尻	横越村小杉字江尻	(平)	須恵器	
51	小杉	〃 〃 字居村3404、他	(平)、(鎌)	土師器、須恵器、中世陶器	
52	山のハサバ	〃 〃 字上田1167	平	〃	
53	上田	〃 〃 〃 1393	縄、奈、平	縄文(晩)、土師器、須恵器	
54	宮尻郷	〃 横越字下郷7027、他	平	土師器、須恵器	
55	下郷	〃 〃 〃	(平)、(室)	須恵器、青磁	
56	横越館	〃 〃 字館ノ腰591	(室)	中世陶器、茶臼	

すでに埋滅した遺跡が多いことも考えられる。砂丘上以外では河川の自然堤防と考えられる微高地上にも遺跡は点在する。

山ん家遺跡は縄文中期（前期後葉まで遡る）、弥生後期、奈良時代の各時期に営まれた複合遺跡である。縄文中期の遺跡としては37砂崩遺跡、38迎山遺跡、41丸山遺跡、20城山遺跡がある。この内城山遺跡以外は当遺跡に極く接近して所在する。縄文後期の遺跡は5西前郷遺跡、18栄徳寺裏遺跡、45笹山前遺跡、48中山遺跡がある。縄文晩期の遺跡は中期の38迎山遺跡に複合し、39前郷遺跡、52上田遺跡がある。なお21斉助山遺跡、31向山遺跡は時期不明のものである。

弥生時代の遺跡の内中期に属するものは20城山遺跡のみであり、後期は39前郷遺跡、45笹山前遺跡がある。なお21斉助山遺跡は時期不明である。

古墳時代の遺跡は西側に集中し、2下西遺跡、14手代山排水路遺跡、17武左衛門裏遺跡がある。

奈良・平安時代の遺跡は非常に多く当遺跡を含めて51遺跡を数える。中世の遺跡は12ヶ所を数える。

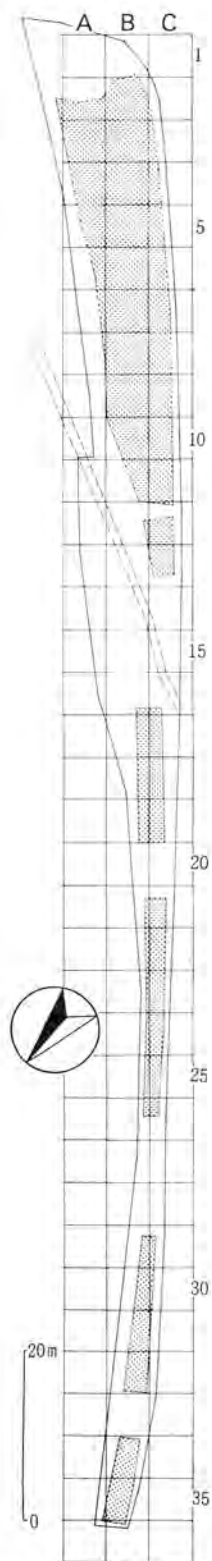
以上の遺跡の内縄文時代、弥生時代の遺跡は複合遺跡である。特に弥生時代の遺跡は必ず縄文時代の遺跡の跡に営まれている。また中世の遺跡の内55横越館以外の集落遺跡も必ず古代の遺跡の跡地に営まれている。これらは古代より引き続くものもあろうが、改めて遺跡の立地を考えさせられる遺跡群である。

### 3. 発掘区の状況と土層序列

#### A 発掘調査範囲とグリッドの設定

発掘調査予定範囲は5,170㎡に及ぶにもかかわらず、実際に調査が出来たのは第3図に示したA区、D区であり、A区域486㎡、D区域120.5㎡である。発掘調査を放棄したB区、C区、及びA区、D区の一部について、その理由は前章第3項に記述した。一方第3図に見る如く調査予定地に対し、実際の調査幅が狭いのは遺構確認深度が平均140cm、最大深度240cmに達した如く深掘を余儀無くされたことにより、通行量の多い道路面及び宅地側の安全性を考え、出来るだけの余裕を残した。その結果上記の如き調査面積に止まった。





第4図 グリット設定図

調査に先立ち調査区域を確定するため5m四方のグリットを設定した。A区、D区を通じて一線で一括出来る様な見通しを以って縦軸をN42度Wとし、横軸に東寄りからABC、縦軸を南側から北寄りに向って1~36のグリットを設定して調査に臨んだ(第4図参照)。

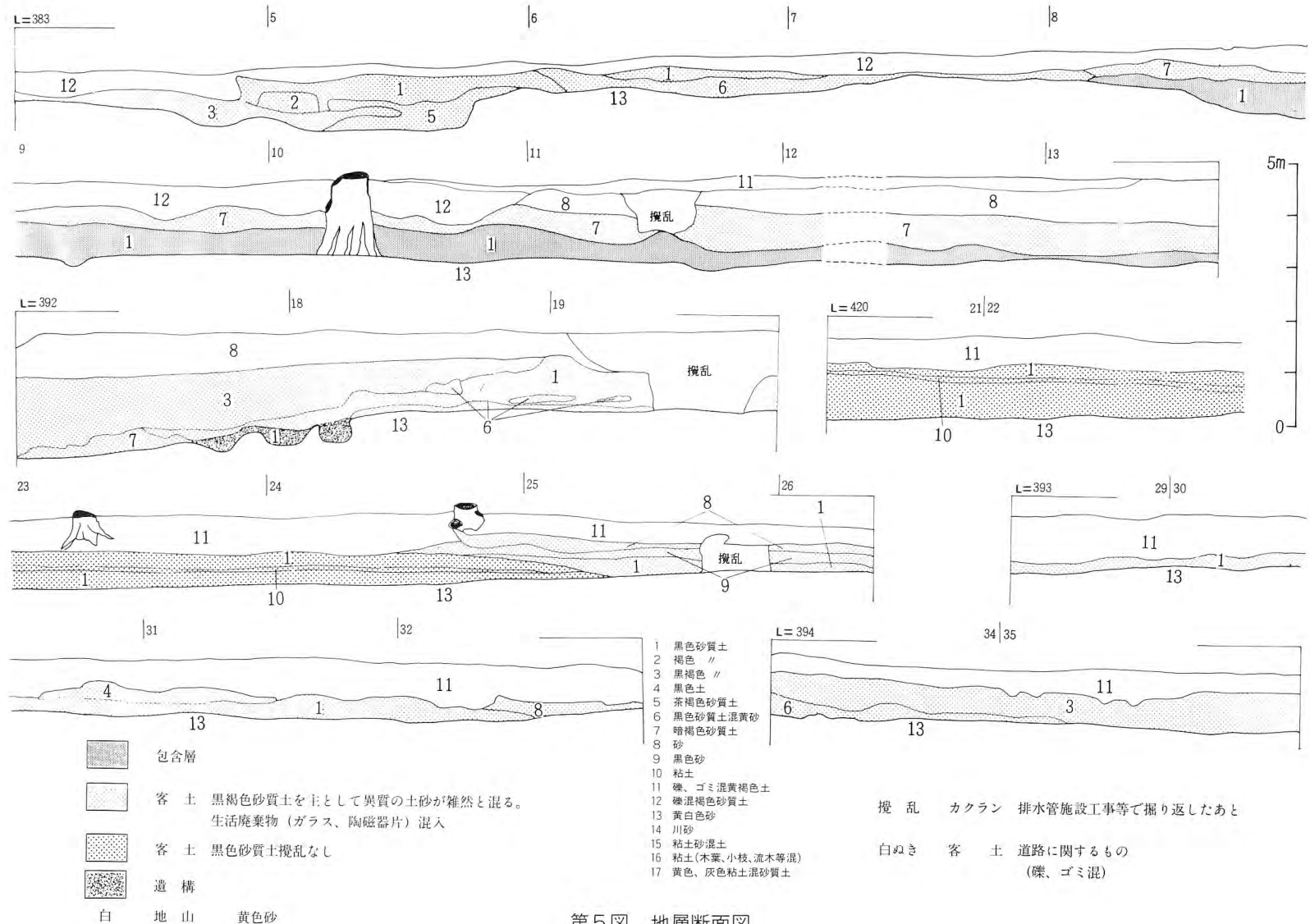
#### B 上層序列 (第5、6図)

発掘調査区域の大部分は砂取り事業とその後の埋立によって複雑な土層序列を呈している。A区域に於ける調査で見える限り、旧地形は南西から北東へ向って17~20度の傾斜を以って砂丘の窪地に落ち込んでいることが分り、A区域の中心以北が低いため砂取りによる破壊が免がれた様子が分る。当砂丘はいうまでもなく黄白色砂によって形成され、その上に30~70cmの黒色砂質土が堆積している。この層が古代の須恵器、土師器を始め、弥生土器を包含している。この土層のいずれかに生活面を有したものと思われるが不明であり、また弥生時代と古代との土層差も判別出来ない。このことは第7図に見る平面のA-6区からC-8区にまたがるラインに於けることで、この北側の低地に残る部分はこの上層に堆積している黒褐色砂質土層上面に古代の生活面を見ることが出来るが、弥生時代の遺物はこの面やこの下層にも見られない。このことは第6図Bセクションに見られる3川砂、4、5の湿地帯を窺がわせる土層であり、弥生後期には前記A-6~C-8区が人々の生活出来る限度だったのではなかろうか。

第5図に示した断面図は煩雑さを避けるため、上方の白抜き部分の客土、中間被網の客土、1の遺物包含層に区分し、土質については別個に数字で示した。ここに示した4~19区までがA区、その他はD区である。この図で見える限り4~7区は砂取り工事によって深く掘取られ遺構、遺物は無い。遺物包含層を残すのは8~13区までである。17区~36区は全て客土の下層は黄白色砂であり、旧地表面と見られる地層を見ることが出来ない。砂取りを含めた様々な理由で埋滅したものであろう。

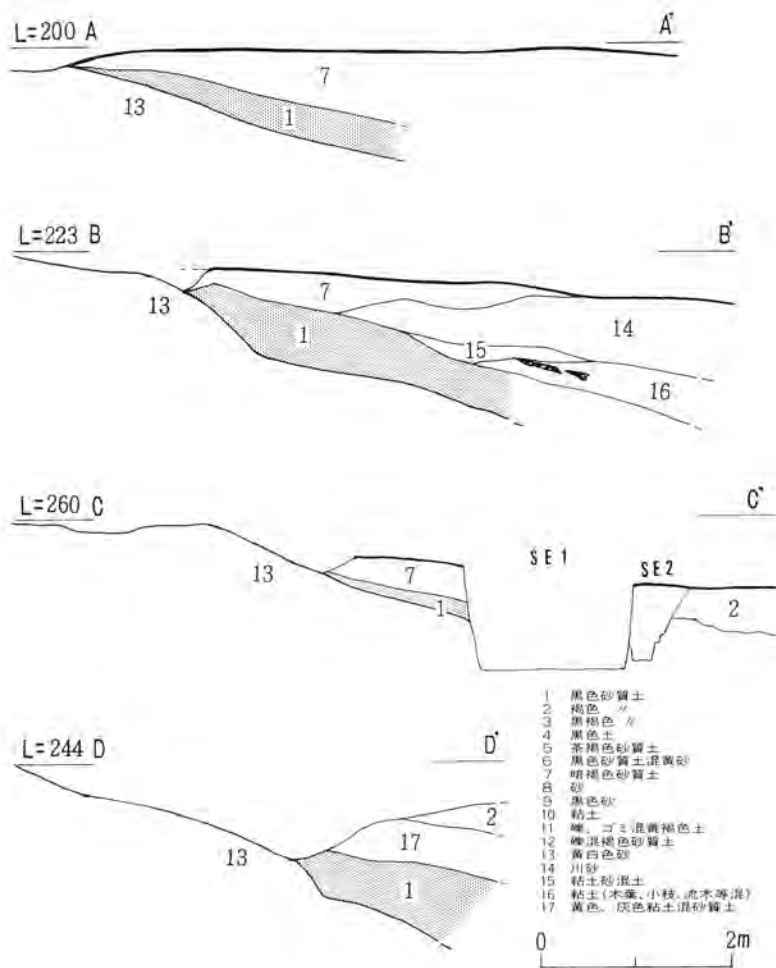
#### C 遺構平面図について (第7図)

調査の結果その大部分は攪乱地帯であることが判明した。僅かに旧状の地山面を残す部分はA地区の内A-6~C-8区より18列までで、その他は攪乱地帯と、遺構を持たない地域とである。これらの状況を細説すれば、まず上記A-6~C-8区を結ぶ傾斜の頂点以南は砂取りによる攪乱地帯であることが分る。白砂の台地を呈するが大小幾つもの窪みを有し、比較的新しい時期のゴミ類を含む土砂によって埋立られている。12列には生活排水路が通り掘下げを中断したがその北側の12、13列には



第5図 地層断面図





第6図 下層(彌生)遺跡の地層断面図

前述した如く破壊、攪乱を免がれた区域は僅かである。この区域はA-6区-C-8区を結ぶ東西の線の北側に当る。この区域は第5図、第6図に示した如く北下りの緩傾斜を呈する。因に東へは20度、西寄りには8度である。

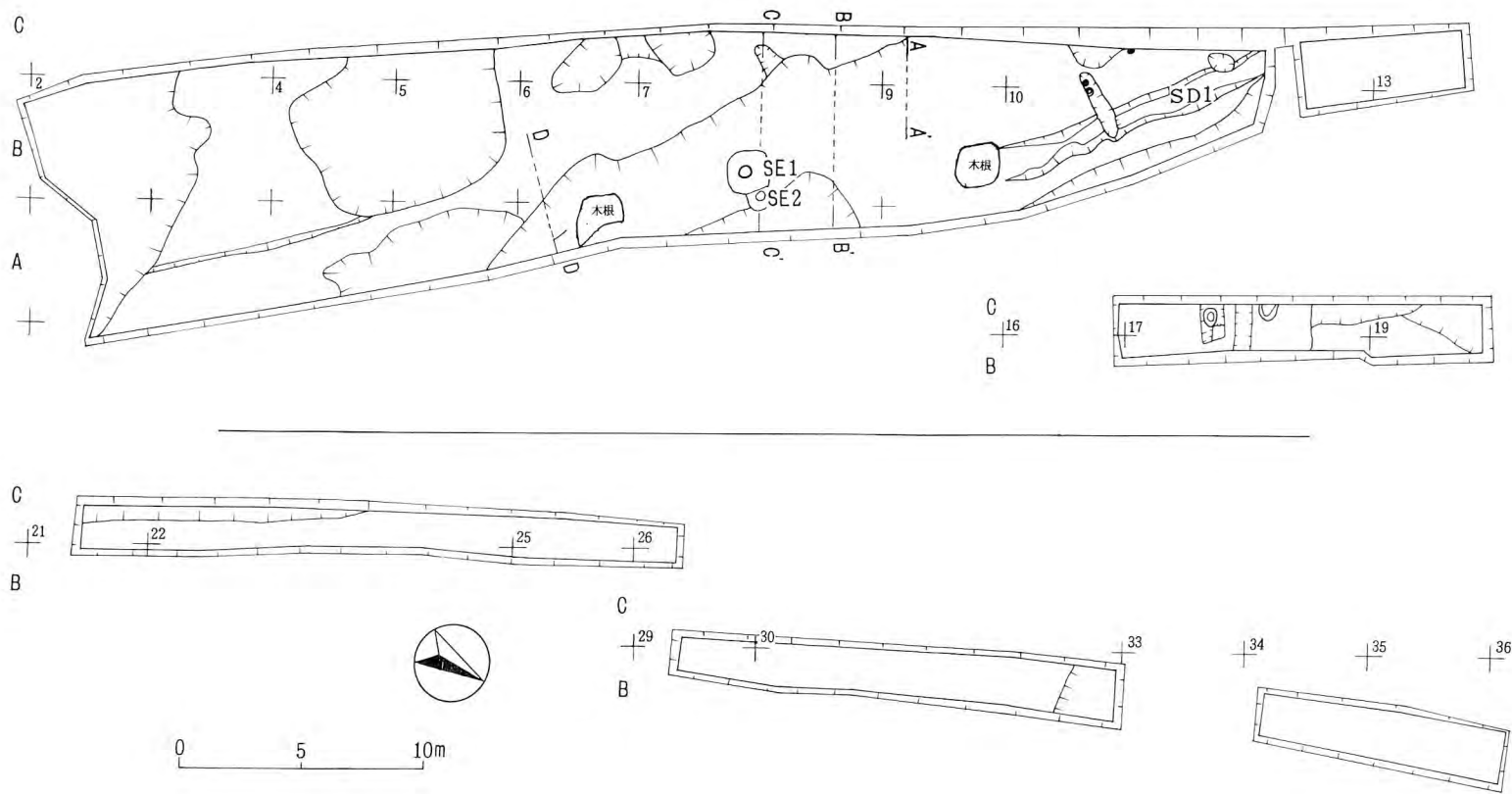
#### D 遺構・遺物検出層

第5図の一部にやゝ安定した遺物包含層を記入したが、これは西側壁面の一部であってあくまでも面として残存しているものではなく、東側窪地に向って、かすかな薄い層を呈する。奈良・平安時代の須恵器、土師器を検出する層はこの包含層にあり、その生活面は第6図の最上面である。また唯一の遺構である井戸遺構もこの面で発見された。

彌生土器の検出も多い。彌生土器の検出は本来なら、前述した奈良・平安時代の生活面である当遺跡唯一の安定した面の下層にあるべきだが、この範囲には存在しない。彌生時代の生活面は砂丘の直上であり、偶然の一致であるが、A-6区-C-8区を結ぶ東西の砂取り最低線直下の

遺構を見ない平坦地である。17区は地表より241 cm計る最も深い位置で地山面に到達するが、近現代の遺構と推定されるものである。18、19列は攪乱で不安定である。

第7図下段はD区域である。21-23列の西寄りは攪乱層である。おそらく暗渠用水路工事による掘込みによるものと考えられる。24-26、29-32列は安定しているが遺構はない。32列中心より落差が見られ37列に向って砂取りが行われた様子である。近現代のゴミの出土が多い。



第7図 調査区域全測図

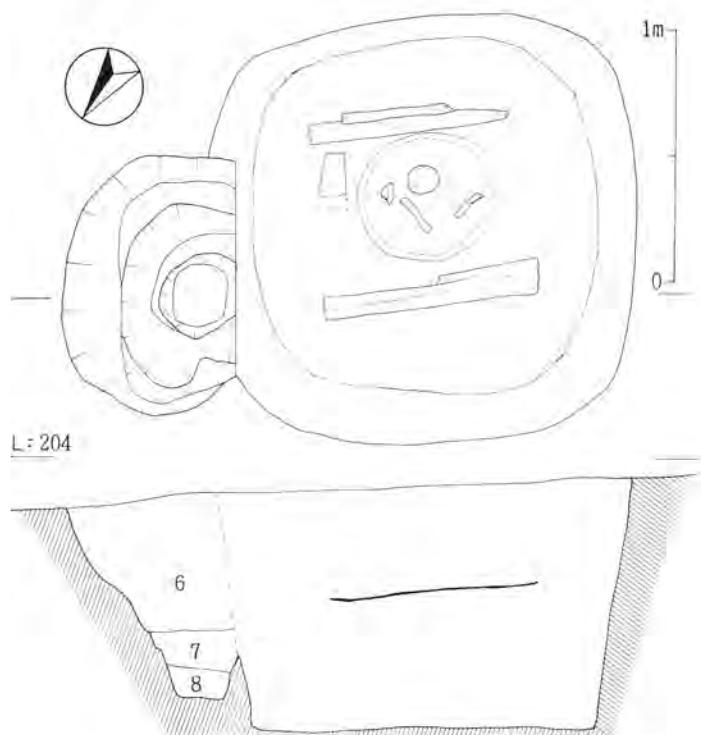
レベルまでで、それより降下した位置には存在しないことが知られた。即ち弥生時代の生活層は、第6図に示した黒色砂層（被網部分）の上方延長部分内に存在するもので、その範囲は第7図のA-6区～C-8区に至るダック条の東側約数十cmまでに限られた。そしてその標高は2m前後である。第6図Cには、その前後の高さに川砂と推測されるものが迫り、その下層に湿地特有の地層が認められる。このことから、弥生時代の生活面は当時の砂丘の窪地の末端部まで広がりを見せていたものであろう。なお、ここで採集した弥生土器の多くは攪乱層内での検出である。また弥生時代の遺構は検出されていない。

#### 4. 古代の遺構

当調査に於て検出された遺構は古代（奈良・平安時代）の井戸遺構、溝状遺構、小穴状遺構に過ぎない。井戸遺構は新旧2本の井戸が一部を切合いながら接して同所に所在するが、古い井戸の時代、時期は不明である（第8図参照）。

##### 1号井戸（SE1）（第9図、図版7）

B-7区に中心をもち8区にかけて位置する。遺構は生活基盤である地表面より一段下った位置に設施されている。一辺が170cmの隅丸方形の掘込みが見られ、45cm前後で井戸設施が表われる。その面での広がりを中心部で145cm前後である。断面図で示した様にこの面は一部が隅上りの傾斜を呈している。井戸の中心はこの掘込みの南寄りに位置し、円形の井側を設施し、上部に板による井枠を施した単純なものである。井側は自然木の丸太を刳いたもので、底部の内径40cm、



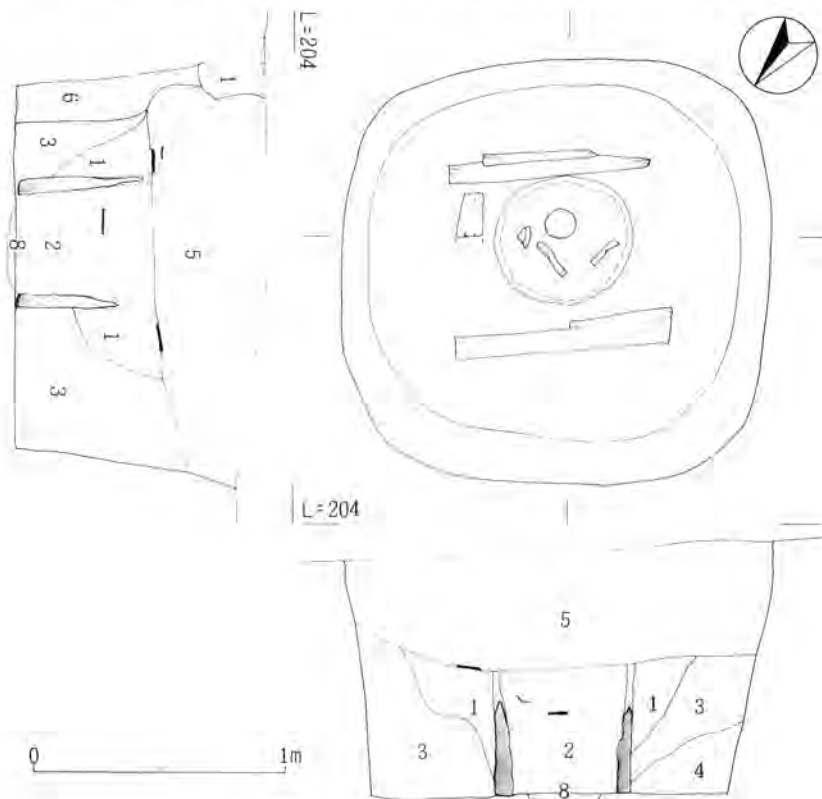
第8図 井戸遺構平断面図

外径52cm、井枠までの高さ55cm、残存する高さ45cmである。この井戸側は図版7の1に見られる如く、第9図断面の様腐蝕状態で確認された。井戸底部は一段の窪みを呈し、黒色土を見るが、いわゆる井戸のまなこが造られていたものと推測される。上部の井枠は一边を完全に失い、他の一边も18cmの長さを残して腐植しているが、板を敷いただけのごく単純なものであるが井枠であろう。これらの板はいずれも腐植が進み完形での取揚げは出来なかったが、現場に於ける計測では北側の板は長さ85cm、幅14cm、厚さ1cm、南側は長さ80cm、幅8cmで細い椀状の板が重なる。西側の板は前述の如く幅は11cmだが長さ18cmを残しているにとどまる。

井戸構築に当っては、前記上方の開口部分の一边が170cmの竪穴を湧水面まで一気に掘り、中央部分にまなこの窪みを掘り、井戸側を敷設する。井戸側は漏水を防ぐため粘質土によって周囲を固め、その上で砂土で埋戻される。断面図西側に見る黄白砂は埋戻直前の崩落であろう。埋戻しは井戸側の高さである55cmで終り、井戸枠を敷いて上部は開放した。前記した如く45cmの段差を見るが、これが汲水の限度であったのであろう。

井戸側（第10図、図版17☆209）に使用された木材は広葉樹で肉眼で見る限りではリョウガン（センダン科、チャンチン）と推定される。現段階では科学的調査を行うに至っていない。井戸枠は杉材である。

井戸の内部からは種子類が検出された。これらも肉眼で見る限りではウリ科の種子、山椒の種



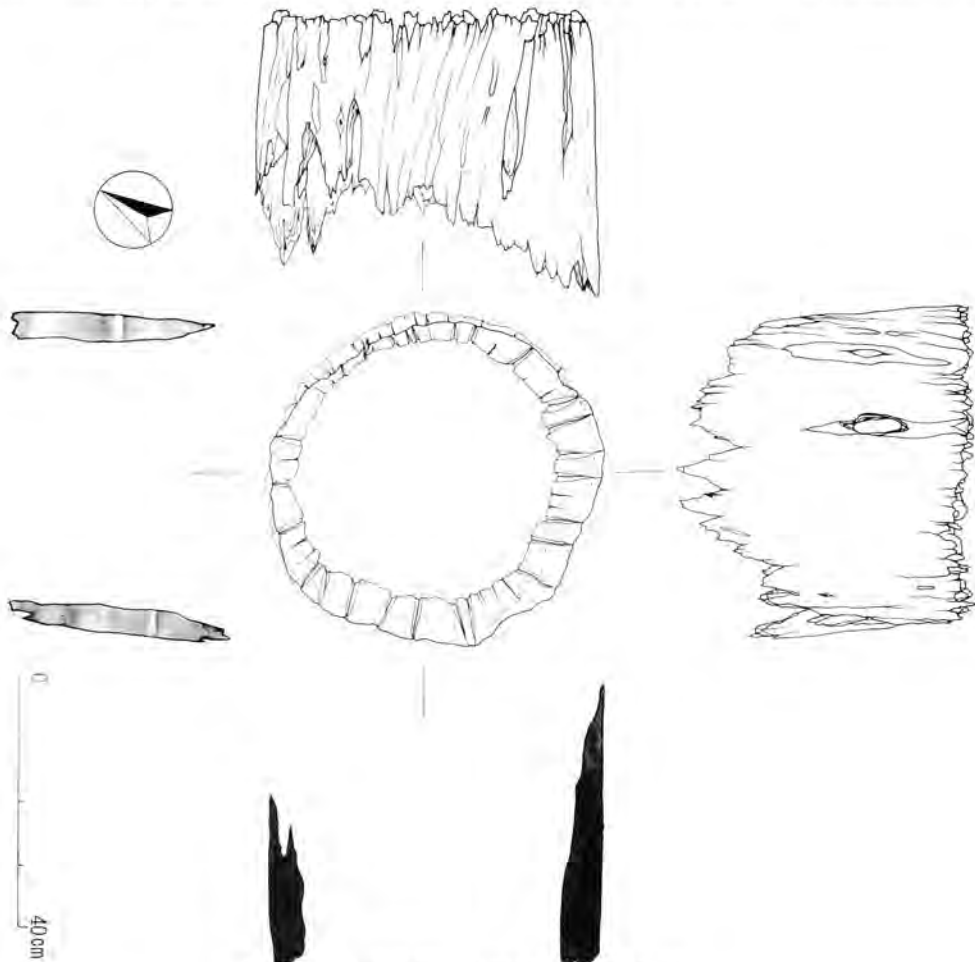
第9図 1号井戸平断面図

子、桃の種子、オニグルミである。このうちウリ科の種子は中間覆土中の検出である。また覆土中より須恵器の坏 (No. 176) を始め、縄文土器、弥生土器が一片ずつ検出された。また、曲物の底板と考えられる杉板の他木片等も流入していた。

2号井戸 (SE 2) (第8図、図版8)

1号井戸北東側に接して2号井戸があり一部は1号井戸に切断されている。この中心はB-7区と8区の接点にある。素掘りの土坑であり何等の施設もないことから、単なる土坑とすることも出来るが、1号井戸と同位置にあること、底部の比高差が1号井戸と僅か13cmであること、坑の掘下げ方が先細りであることから井戸遺構とした。

2号井戸が確認されたのは1号井戸の掘削がかなり進んだ事点であり、攪乱層と考えていたもので、その接点部分にやゝ不明な点もあるが、1号井戸によって断切られているが幸いにも中心部を残していた。2号井戸は上口直径100cm強の円形で内部に3段の小ステップをもって坑径を下げる。第1段は深渡40cm程で坑径70~80cmに落ち、第2段は60cmで坑径50cm、第3段は65cmで坑径35cmに絞られ、底部は長軸22cm短軸18cmの隅丸の矩形を呈する。地表からの深度は85cmだが



第10図 1号井戸 井戸側 実測図1/12

1号井戸との差は前述した様に13cm浅い。遺物等の検出は覆土中に流入物である弥生土器1片がある。

#### 溝状遺構（SD1）その他（第7図参照）

B-10区からC-12区にかけて浅い溝状遺構がある。幅員は一定でないが上幅100~150cm、底部は50cm前後の幅である。深さは10~21cmで一定しない。確認出来た長さは12mであるが未だ西側の未掘部分へ続いている。中間部分に直角に交わる幅70cm、長さ300cmで深さ20cm程の溝と重なるがその形態から異質のものである。この後者の溝の側面内部に2ヶの浅い柱穴（ピット）状の穴がある、直径20cmと30cmのもので深さは溝の上部から27cm、42cmを計る。ピットはC-11区にいま1ヶがあり、直径20cm深さ31cmを計る。

第1の溝状遺構の東側には未掘区域に添って長い落ち込みがある。これはその東寄り地下に埋設されている亀田土地改良区の用水路工事による掘り込みと考えられるものであり、第1の溝もこれに平行していることから、古代や弥生時代の遺構と見るよりは、水路工事に関するものと見ておきたい。後者の溝はその用途を知ることは出来ない。また3ヶのピットも直接建造物に結びつくものとは考えられない。

C-17区を中心にして2条の溝状遺構と小土坑がある。溝は幅1mのものと70cmのものとがあり前者は途切れている。深さは前者が10~14cm、後者は10~22cmと一定しない。溝内にある土坑は長軸60cm、短軸50cm、深さは33cmを測る。北寄りにも土坑の一部を検出したが、推定直径80cm深さは36cmである。これらの溝及び土坑共、内部を埋める黒色土から現代のものと考えられる。

### Ⅲ 出土した遺物

#### 1 遺物の出土状況

出土した遺物は縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、土製品、自然遺物がある。これらの出土状況に関してはその大多数が中間位置の客土中から出土するものであった。この内縄文土器は点数的にも9点に止まるが、1号井戸内の1点の他は総て客土層よりの出土である。弥生土器の多くも客土層より出土した。安定した土層からの出土はごく少量である。この内あるものは土師器、須恵器と同一層での出土であり、ごく少量の4点が下層からの出土である。土師器、須恵器も客土層よりの出土が多いが安定層内に比較的多い。井戸遺構以外に遺構が検出されていないことから、まとまった出土は見ない。まとまった遺物の出土は土製品で、土錘6点がある。

D区に於ける出土状況はいうまでもなく客土層のものであるが、その数量は数点にすぎない。

#### 2. 遺物の概要

##### A 縄文土器 (第11図、図版9-1)

いずれも数cmの細片である。1、2、4は羽状縄文を主体とするものである。3も含めて縄文前期後葉の土器である。5、6は竹管文系、7、8は縄文、撚糸文を施す。共に縄文中期の土器である。9は平行沈線文系であるが時期を特定出来ない。細部に関しては一覧表を参照されたい。

##### B 弥生土器

出土遺物の中で最多数を占める。器種器形では細片のものが多く確実な区分は出来ないが壺形(10~54)、甕形(55~101)、底部(102~117)、甗(118)、器台(119、120)がある。13図に



第11図 縄文土器 (前期・中期) 1/2

示したものは縮尺の関係で同一系態のものでもここに一括して呈示した。なお土器の細部に関しては一覧表に明示した。

1) 櫛描紋系土器

a) 列点紋 a 類 (10、11、46~50、67~68) 施紋具の先端による庄痕で器の口唇部に連続して施されたものである。この内10、50は口唇部の外寄りに、49を除くその他は口唇部内寄りに施紋されている。49は内外2列の施紋がある。46は口唇部外寄りに刻目を有する。器の内外面は刷毛調整が主体を見る。68の内壁は丹塗りが施されている。

b) 列点紋 b 類 (12、13、51~53) いずれも口縁部に羽状列点紋をもつものである。12は口唇部から内壁にかけて2段が見られ、53も細片であるがその可能性がある。いわゆる羽状2段列点紋である。51、52は内壁に1段が施されている。13は受口状に張り出した口縁帯外面に1段の羽状列点紋があり、口唇部には斜格子状の圧痕紋がある。

c) 列点紋 C 類 (45、69) 壺形土器で荒い刷毛状工具による横ナデの上に口縁に添って列点紋が施されている。

d) 波状紋 (16、17、24~26) 16、17は同一個体と思われる。刷毛状施紋具による調整の上に6条1単位の櫛状施紋具によって数種の紋様が施されている。上方より平行沈線紋、波状紋、簾状紋、2段の波状紋がある。この波状紋は工具の両端を交互に基点とする連続の扇形紋による技法である。24、25は共に波状を有し、前者は振幅の少ない波条、後者や、荒い波条を有する。共に細片であるが多条櫛描紋に属するものであろう。26は特に細片で不明であるが一応ここに分類した。

e) 斜格子紋 (18、19) 18は壺頸部に幅3cmの張土による凸帯を有し、その凸帯部に施紋具先端の圧痕によって斜格子紋を施す。左下りの浅い圧痕と右下りの深い圧痕とに使い分けている。図示した中心部に凸帯が無いが剥脱している。地紋には細かい刷毛目がある。19は紋様部分の破片である斜格子の角度が強くと、施文具の圧痕の違いから別個体である。共に小松式である。

f) 平行線紋系 (22、23) 共に肉薄の器である。22は縦位の刷毛状工具と横位の櫛状工具による施紋と思われる。23はや、深い斜格子状の沈線が見られる。内壁は両者とも刷毛目を持つ。小松式系である。

g) 簾状紋系 (20、21) 挿図では不明瞭だが上部に簾状紋が残る。先端の鋭い工具による刺突紋が主力を占める。内壁は刷毛目がある。小松式系である。21は5条1単位の施紋具の先端による簾状紋が施され、下部には同じ工具による掻揚紋がかなりの密度に施される。

h) 掻目紋系 (28~33、42、54) 前項21の簾状紋の下部に見られる施紋具先端部による掻揚による施紋を有する一群である。この施紋位置が器内壁の口縁帯にあるもの28~31、42、54と、外壁にある32、33とがある。施紋具は5条~8条単位のものが知られる。施紋は無策意のものと整然と並んだものが見られる。これらの内には掻揚手法と見るよりは刺突技法と考えられるものもある。これらの内や、特異なものがあり、42は4条1単位の太い施紋具で僅かに掻いたもので、一見して刺突に見える。なおこの器は口縁外部に張土による口縁帯を有し、口唇部に刻目紋を有



する。小松式土器である。これら一連の掻目紋の内には簾状紋の崩れと見ることの出来るものもある。なお28は器内壁に2個のボタン状の飾りを張り付けている。

i) その他 (27, 43, 44) 27は楕描による逆し字あるいはコの字状の沈線が施されているが細片のため不明瞭である。一応流水紋に部類するものと考えている。43, 44はいわゆる凸帯紋系の土器である。器の胴部あるいは肩部に細くて高い土紐による凸帯を有し、その帯頭に刻目がある。43の刻目は楕状施紋具の先端による列点紋が明瞭であり、44は風化がはげしく不明瞭であるが同様のものである。共に小松式土器である。

## 2) 篋描紋系土器

二ツ釜式系土器 (36~40) いずれも細片であり確定は出来ないが、肉薄の器壁の胴部に2条あるいは3条程の曲線が篋描されたものである。40の器面は篋みがきが施されている。

## 3) その他

a) 擬縄文 (14, 41) 14は頸部に沈線が一周する口縁である。外面は刷毛目調整だが内面に羽状の擬縄文を施す。41は壺胴部片である。沈線に区画された部分に僅かに擬縄文を見る。図示した拓影に見る太い斜状のものはキズ痕である。南御山II式に比定される。共に原体は不明である。

b) 貝殻紋 (15) かなり外開ぎみの口縁を呈する壺である。内壁の口唇部に添って細い羽状の列点紋が施される。楕状施紋具、あるいは刷毛状施紋具によるものとは異なるところから区分した。確証は無いが貝殻による施紋であろう。

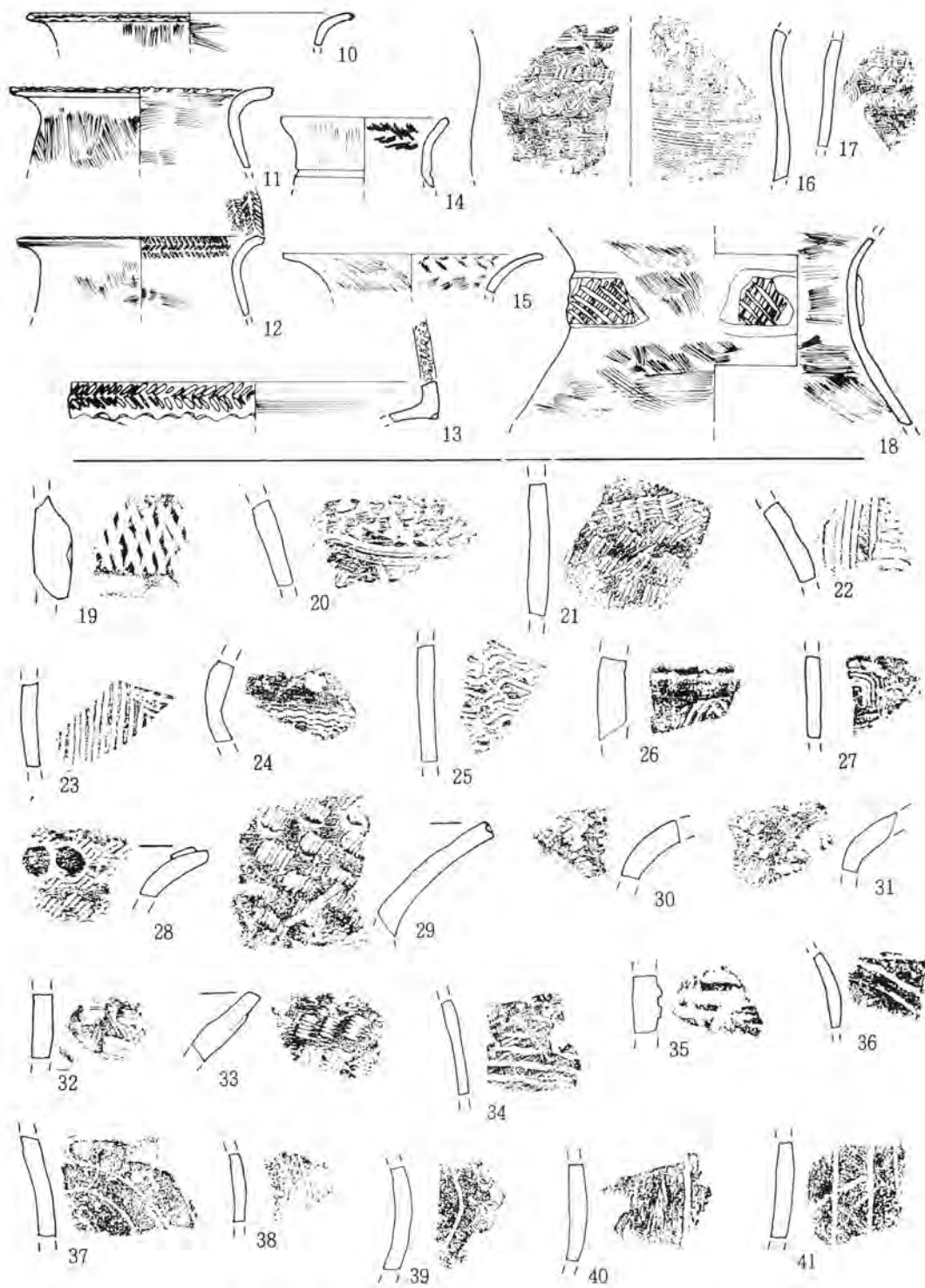
c) 叩き紋 (34, 35) 34は薄い器壁に条線状の叩きが施され、その上に刷毛状施紋具によって調整されている。35は細片であるが故に突起部を張り付けた如くに見えるが叩き紋であろう。角張った溝を有する施文具と見られる。

d) スリップ (86, 109, 110, 119) 泥状の素地を器面に覆って土器の表面を仕上げる方法で、化粧土、化粧掛と呼ばれるものである。86は化粧掛けの上から縦位の篋ナデによって調整が施されている。109は刷毛目紋の上に薄い化粧掛が行われている。119は器台と推定されるもので、器内部分、脚部内側に化粧掛が行われている。

e) 刷毛目、篋調整土器、その他図示した口縁部のものの内に無紋の土器もあるが、多くは刷毛目による調整、即ち刷毛目紋も有するものが多い。また前項の種々の紋様帯のものも多くに刷毛目調整が施されている。

また篋状工具による縦位のナデによる調査も見られ、86のスリップの上の調整、79の無紋での篋ナデ、72, 87の器の腰部から底部にかけての篋ナデなどがある。

f) その他の器種 (118~120) 118は底部の中心部に10mmの孔を有する器であり甑である。底部の残欠品であるが、刷毛目紋が残る。119, 120は器台と推定されるものである。前者はスリップで前項に記したが、肉厚の造りである。後者は脚部の残欠で肉薄で手びねりの痕跡を内部に残している。



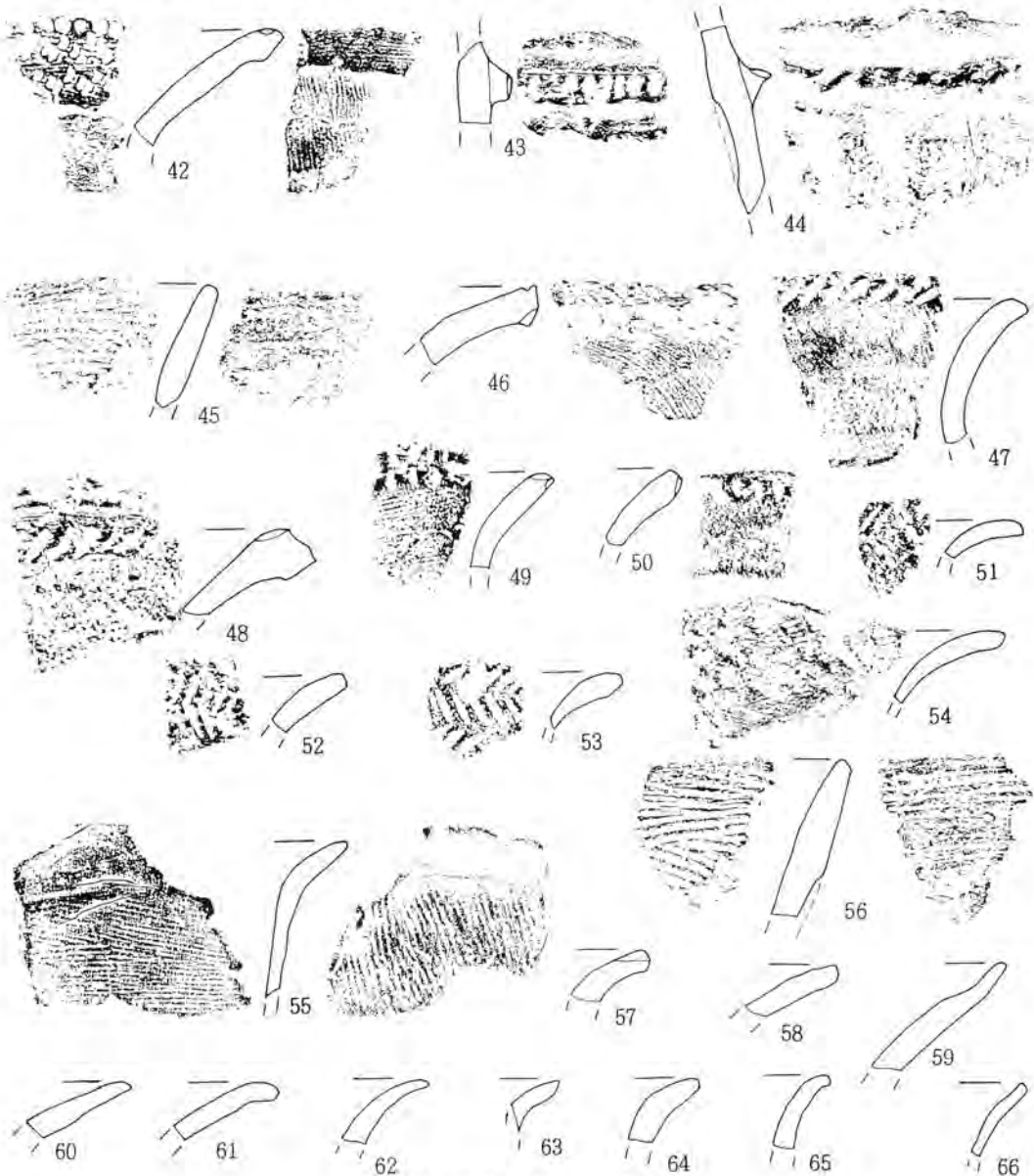
第12図 弥生土器ツボ類(10-18) 1/4、(19-41) 1/2

g) 例外の土器 (75, 81) 75は甕形土器の口縁部片である。口縁部の両面を張土によって補修している。横3~2.5cm、縦1.8cmの張土が見られる。81は回転台、或るいはロクロ状用具を使用しない手びねりの土器と推測されるもので、口径16cmを測る甕形土器である。

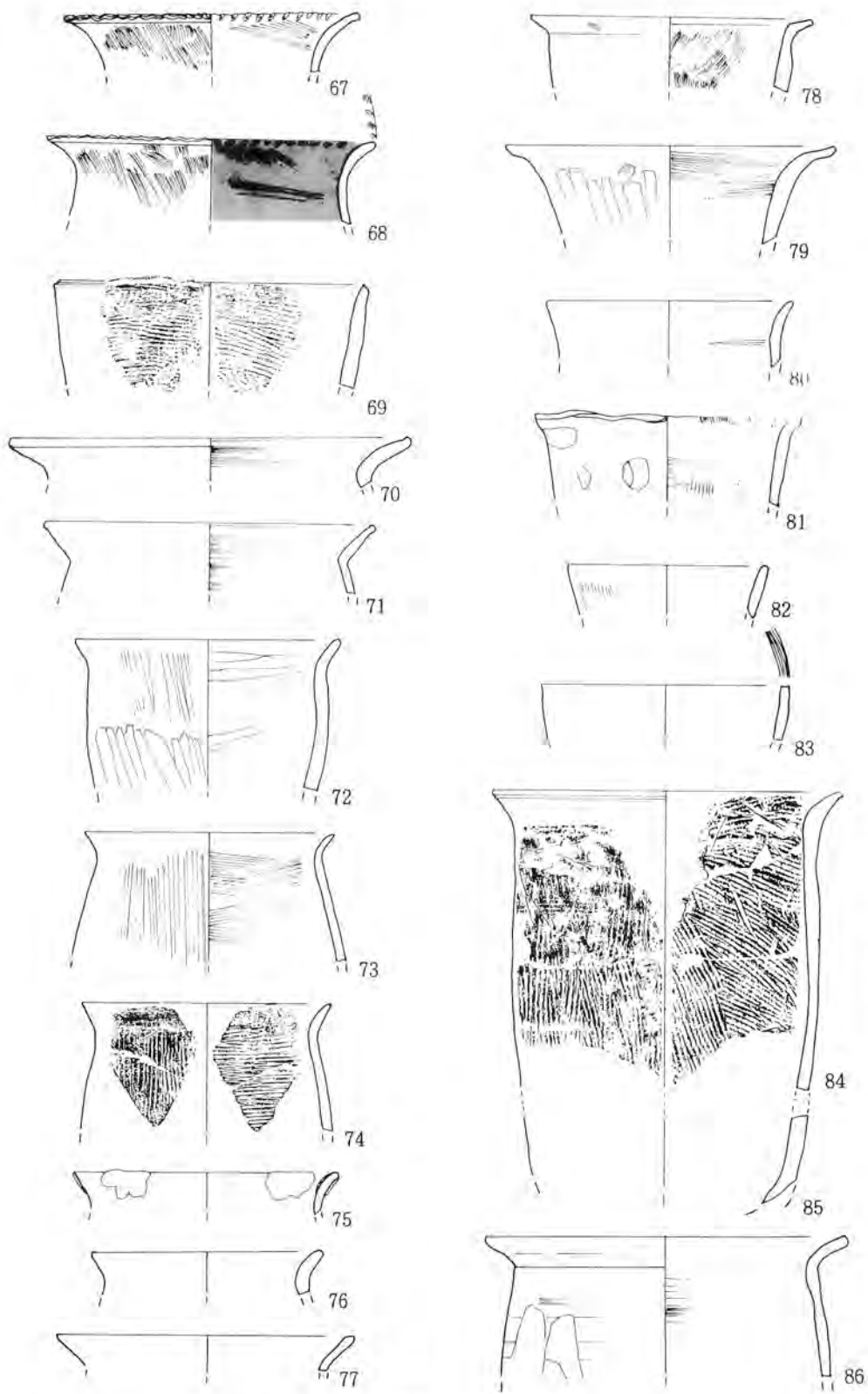
C 石器

少量の石器がある。121はいわゆるスクレーパーで片面に刃部を造り出している。長さ26mmの硬質頁岩である。122, 123はスリ石である。前者は握り手のくびれを持つが自然石で、あるいはタタキ道具に用いられたものかも知れない。この他剥片16点がある。

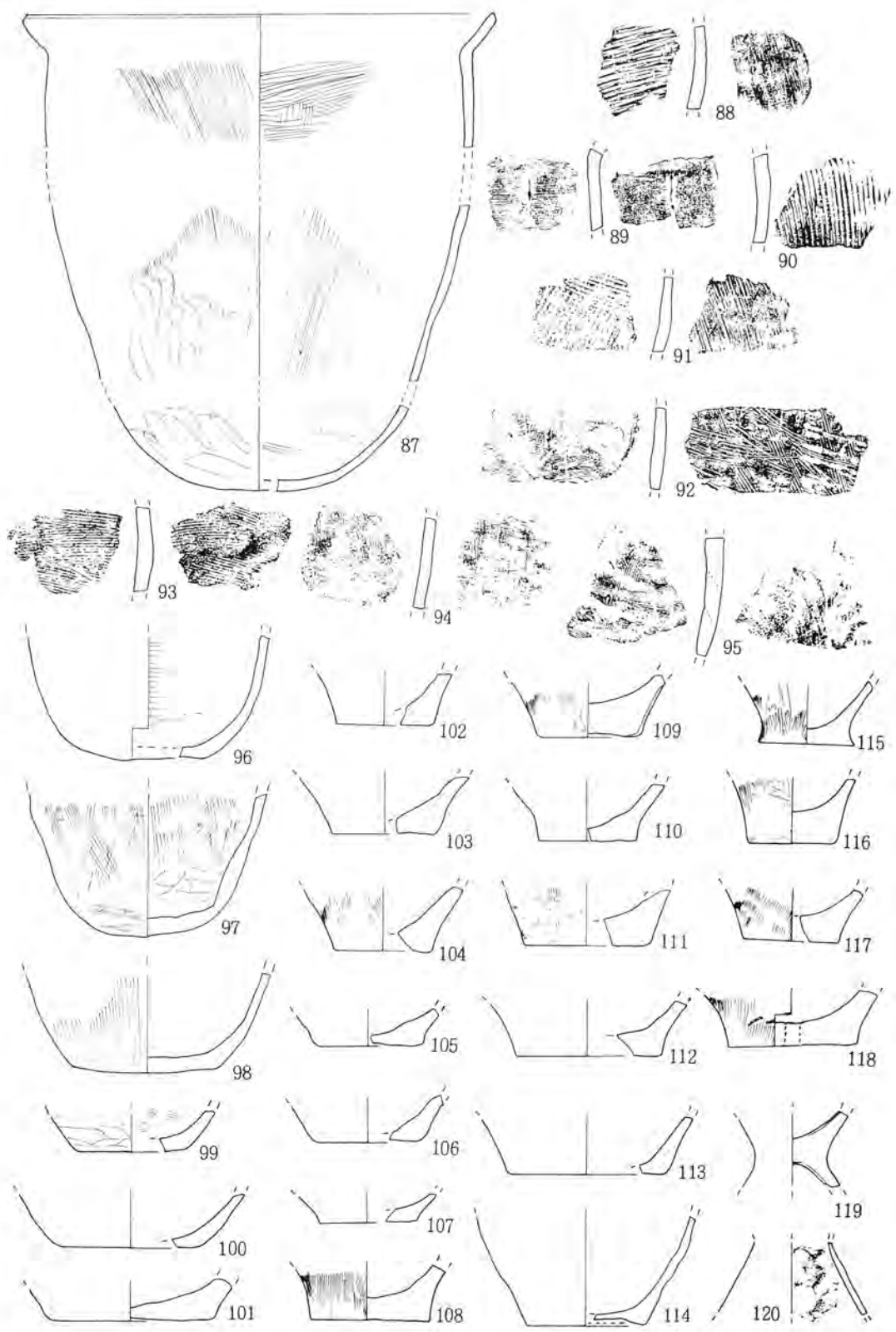
これら石器類の所属は不明である。縄文時代、弥生時代のいずれかであろう。



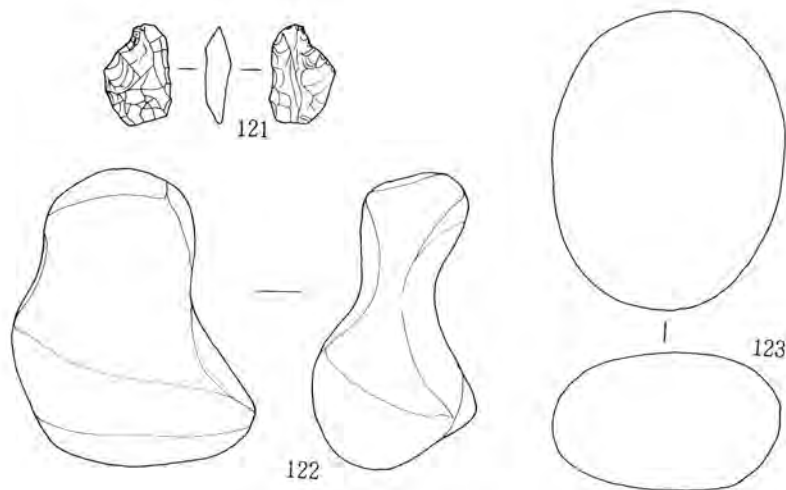
第13図 弥生土器 カメ類1/2



第14図 弥生土器 カメ類1/4



第15図 弥生土器 カメ類・底部1/4



第16図 石製品1/2

#### D 古代の遺物

時代を異にする古代の土器類と自然遺物がある。土器類は土師器、須恵器、土製品である。この内土師器は全てロクロによる水挽法によって成形されたいわゆるロクロ土師器であり、須恵器と時期を同じくするものである。

##### 1) 土師器 (第17図)

**甕類** (124～133、137～146) 器の全容を見ることの出来るものは無いが、頸部で外反する口縁部と比較的長い胴部を呈するいわゆる胴長甕に部類する大型のもの124と、ほぼ同型と推定出来る中型の125の他、あまり胴部が長くない小型の126の三種類程に分類出来るが、ここではそれらを知る事の出来る遺物の出土量がごく限られているので、改めて区分しない。

124～128は折り返した口縁に2次的調整を程んど加えない単純な口縁を見る。124は頸部に輪積の痕跡を見る。口縁の外反は大きくしたがつて器の最大径は口縁部にある。127は口唇部を押えられている程度の変化を見、最大径は胴部に見るものであろう。これらの甕の底部は丸底を呈するのが一般的であるが、限られた少量の出土片の中に丸底の破片を検出していない。128は頸部に沈線が一周する。129は外反した厚い口唇部を内側につまみ上げたものである。口径の計測は出来ないが中型のものであろう。125は開いた口縁の先端部を内側に折り返したもので、籠状工具で頸部をおさえている。126は口唇部外面を指先でおさえ、頸部外面を指又は籠状工具によっておさえられたものである。ここでは小型であるが、土師器甕類本来の大きさから比較すれば中型に部類するものである。130～133は甕の底部である。いずれも平底である。133はロクロからの切離しが回転糸切り痕を残している。131は底部に張土が見られる二重底を呈している。これらが大型、中型の双方に関わるものか否かは不明である。

138～146は主に胴部以下の施紋を示した。甕の頸部から胴部上層にかけては137或いは124の如く内外共に刷毛目によるナデが主体であるが、胴部は叩き目紋が主体である。叩き目は平行

条線状のものであり、内面の当具は平行条線状のものと曲線状のいわゆる青海波紋とがある。また142の外面の如く刷毛状工具によるいわゆる刷毛目紋のものがあり、内外面共に刷毛目紋の上部から叩き技法が施されたもの142、144～146などがある。

**埴類** (134～136) 埴と識別され、さらに図示出来るものはこの3点に過ぎない。全容は勿論不明であるが、口縁部に最大径を有し、底部は丸底で浅い半円形を呈する。その口径は40cm程のものが普通である。134は口唇部を上方へ折り返し、外面をおさえたものであり、135は外反する口唇部の先端外部をおさえたもの、136は同じく外部を強くおさえた造りである。いずれも口縁部は指によるヨコナデ、胴部は内外共に刷毛状工具によるヨコナデが見られる。胴部から底部にかけての施文は不明であるが、一般的には外面の平行条線状の叩き目紋、内面の当具は青海波紋などが施される。

**坏類** (147～151) ここに坏として一括したが、本来3種類に分類するものである。147は口径20cmと云う大型のものであり本来なら大皿、盤とも呼称するものであろう。図版15に見られる様に実際の遺物は部分的なものであり、やゝもすると計測に多少の誤差を見るかも知れないが、大差は生じないと思う。器壁の立ち上りはやゝ外開きぎみで口唇部を受口状に変化させている。これは丸棒状の工具で内面からおさえによる手法である。器面には内外共に丹塗りが施されている。

148も細片だが全容を知り得る。やや急な立ち上りを呈する器壁を有し、口径に対する底径比が大きい。器外面には剝離痕があるが丹塗りの痕跡がある。149、150は器壁の立ち上り方に多少の異が見られるが、形態的には148に類するものであろう。

151は**黒色土器**である。比較的小さな底部から外向きの器壁が立ち上る。全容は不明だが坏と言うよりは浅鉢状の埴であろう。内面に黒色処理が施され磨き上げられている。外面も緻密な胎土を良く磨き上げている。俗に内黒土器とも称している。

## 2) 須恵器 (第18、19図)

**鉢** (152～154) 2個体の把手付鉢であり、154は153と同一個体である。152は上方へ立上る短頸の口縁部を有し、肩から胴部にかけて脹みを持つ。その最大径直下に把手を持つ。把手はやゝ偏平で先端が尖っているが断面は丸味を持つ。図示した様に牛角状に上向きの曲線を描く。細片のため把部の検出は1個であるが、おそらく左右対象に付設されていたものと推定される。153は把手部分とその接合部の細片であり他に154の胴部の破片があるが形態は不明である。把手部は前者と同様の丸味を有する偏平なもので、先端は弧を描いて丸味を持つ。これらの器壁は共に平行条線状の叩き目紋と内部の青海波紋からなる。

## **壺類** (155、159、164～170)

**双耳壺** (155) 直立ぎみの短頸壺の肩部に耳部を有する。耳部は欠損しているが8mm程の円孔を有する。1個のみの検出であるが相対する面にも付設されたものと推定され双耳壺とした。壺は肩の張りの強い形態で、胴部との接点に沈線が一周する。

短頸壺（159）口径132mmに対して、高さ15mmの短い頸部が僅かに外向きに立上っている。肩部から胴部にかけてほぼ球状の形態を呈する。器壁はかなり肉薄である。

広口壺（164～170） 164～166は広口壺の頸部である。外反する口縁部の先端を外下部へ強くつまみ出し、また上部へも僅かにつまみ出している。外面には櫛状施紋具によって歯状紋（鋸歯状紋）が施されている。167は頸部の接合部分の片である。内側のナデと下部の青海波紋が残る。168～170はいずれも叩き目紋を有する細片であるが、広口壺の胴部、腰部の部分と推測出来るものである。

#### 瓶類 （156～158、160～163）

長頸瓶（156～158）いずれも肩部の細片であり、頸部の形態も把握出来ないが長頸瓶であろう。156は頸部の取付部分を知ることが出来る唯一のものであり、そこにリング状の細い凸紐が一周する。頸部の外径は49mmと知ることが出来る。やゝ丸味を帯びた肩部はロクロ水挽によるヨコナデ痕が残る。157、158は肩部上面がやゝ平坦な造りで、肩が強く張り出す。後者の肩部には僅かな凸帯が見られ、上部に沈線が周る。共に肉薄の器である。

横瓶（160～163）160は頸部側面の接合部分の破片である。胴部での最大器高（径）198mmを測る。162は胴部中央部分の片で最大径は212mmを推測することが出来る。共に刷毛目と青海波紋から成る。また162の表面には1条の自然釉が流れ、横瓶の窯積の形態が知られる。161、163はそれぞれ側面の塞ぎ孔部分であるが、共に成形上部の孔である。それぞれ別個体と思われる。

坏蓋類 （171～175）図示した如く全容を知るものは皆無であり、また鈕部分を残すものも無い。器の推定直径は170～154mmであり、後述する坏類より1段と大型である。それぞれ器端部の折り返し部分に大きな特徴を持つが、174は特に顕著である。内側の筥調整も鋭い。

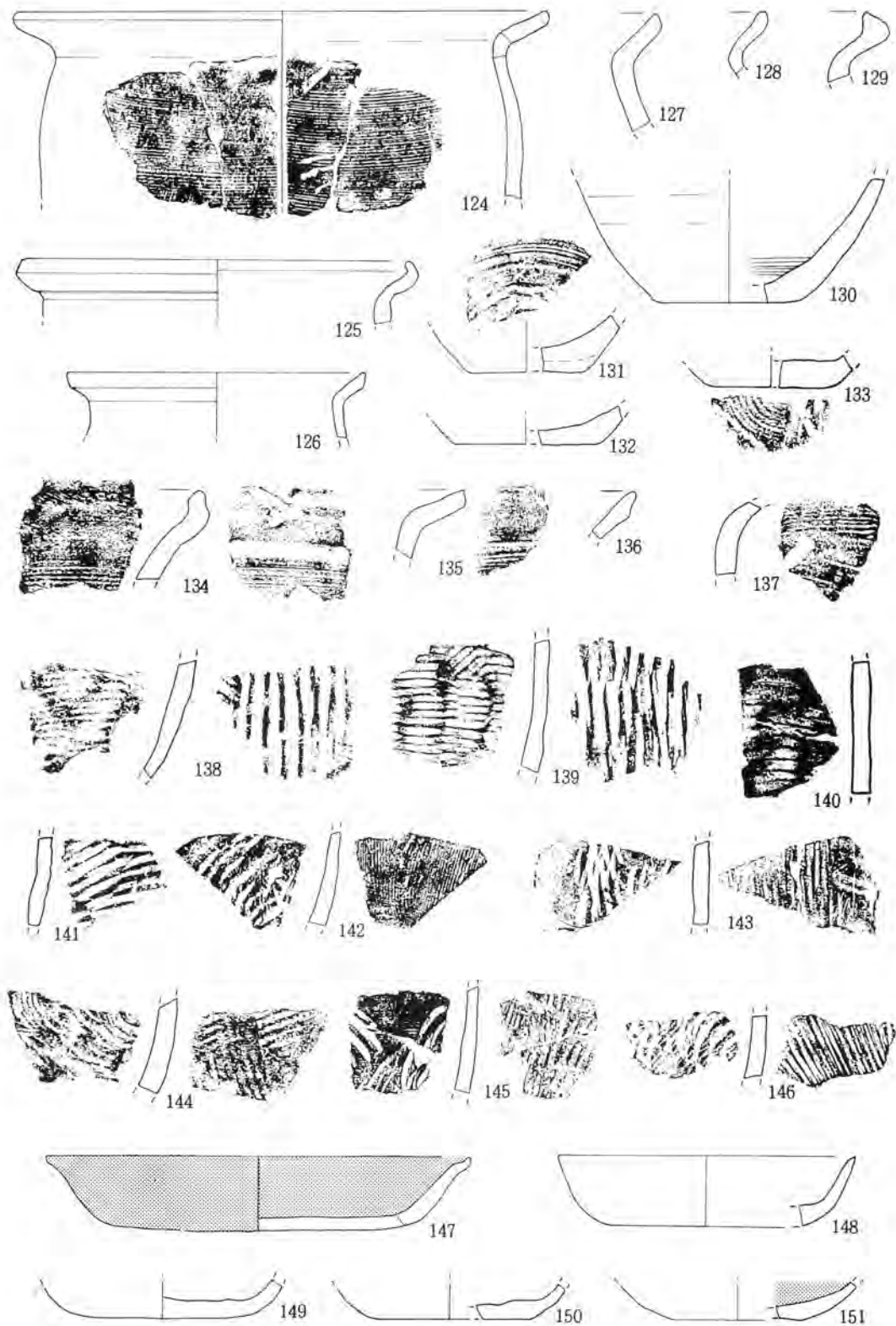
#### 坏類 （176～192）

坏（176～189） 後述するところの高台を有するいわゆる有台坏に対して無台の坏である。図版17の如くいずれも破片であるが、ある程度の形態を知り得ることが出来る。口径は136～130mmと統一し、器高は37～30mmとやゝバラ付きがある。形態的には底部から腰部にかけて丸味を持ち、器壁の立ち上りも丸味を帯びており、総じて肉厚である。器壁のやゝ外開きぎみのものに186、187があり、前者は口縁部にかけての器壁が薄い。底部に見る特徴では筥起しによる後でナデ調整を加えたものが多い。

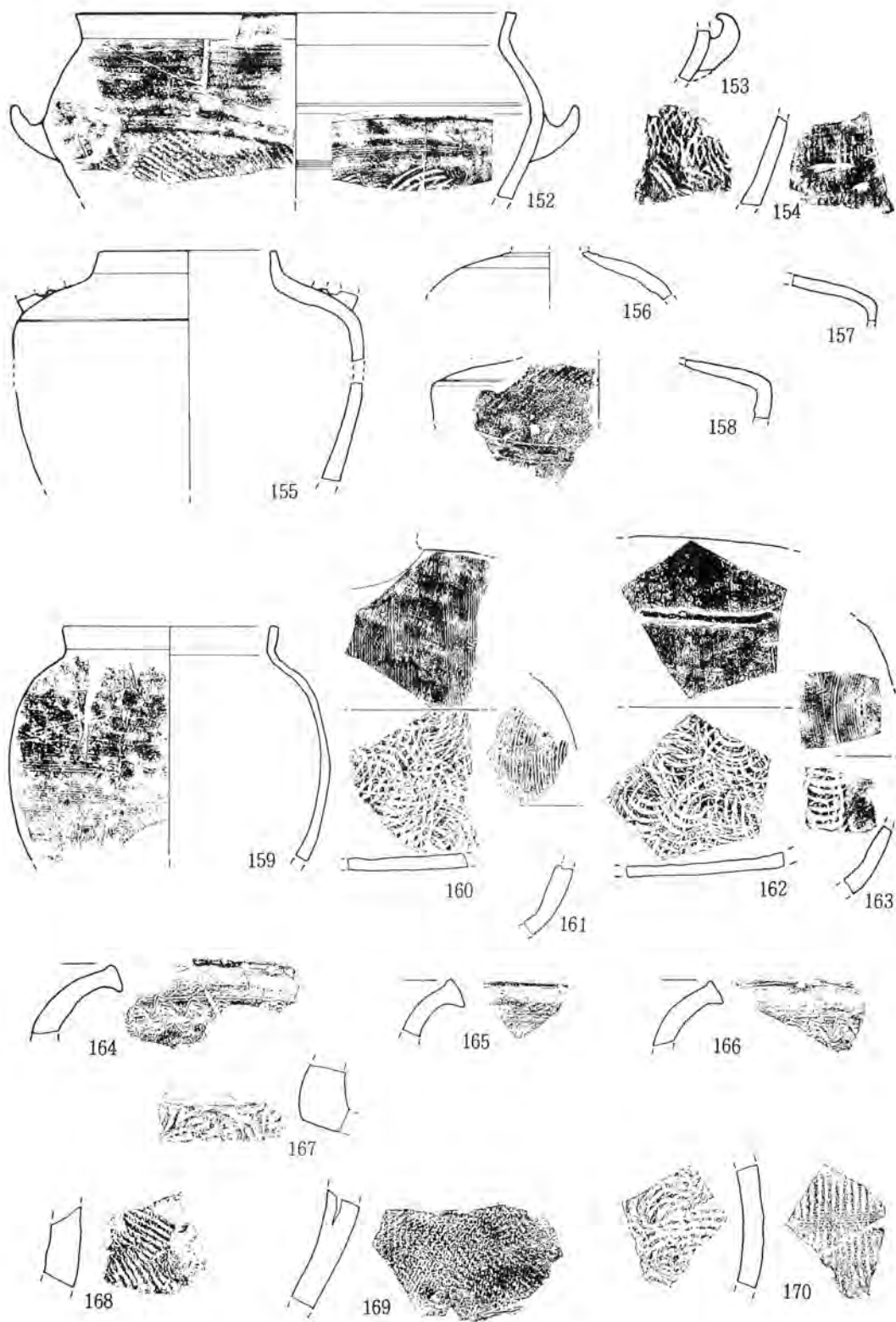
有台付（190～192）3点の検出であり、いずれも低い高台を貼り付ける。190、191の高台は外側へ張り出す角度のもので外面が角立つ。192は丸味のある断面の高台である。器壁の立ち上りは口縁部でやゝ外反する。口径150mm、138mm、器高43、46mmと多様である。

碗 （193～195） 高台を有する大型碗に部類する。高台は低く、やゝ粗木なもので、193の外向きのもとは特異と言えよう。器の全容を推測出来るものは195のみである。この器は口元と胴部中央にそれぞれ細い沈線を一周させている。また腰部の造りは篋状工具による削りが施されている。沈線紋を有する碗は稀のものである。

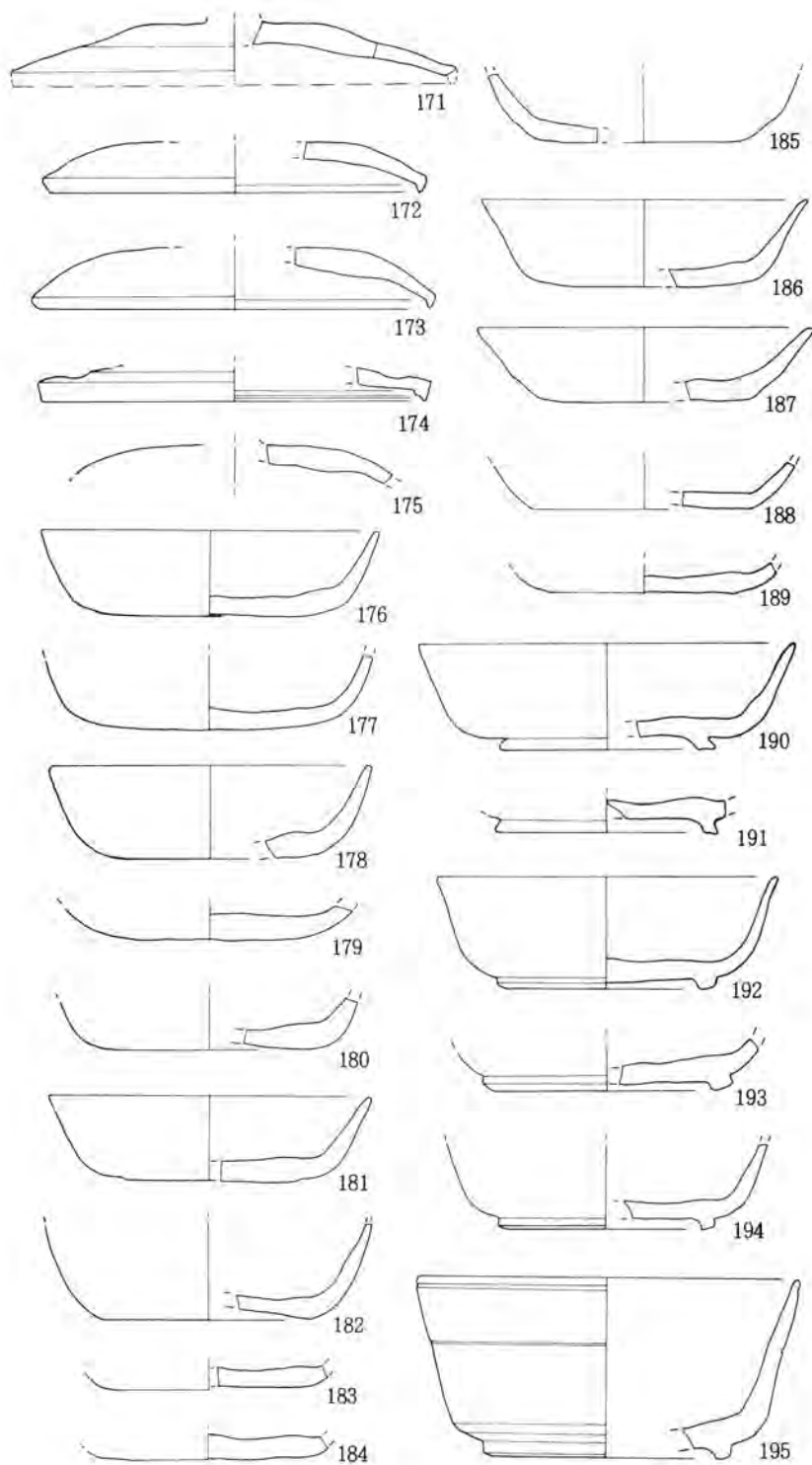




第17図 土師器1/3



第18図 須恵器1/4



第19図 須恵器1/3

### 3) 土製品 (第20図)

**土錘** (196～201) 土師質の土錘(陶錘)である。長さ65～50mm、最大径16～12mm程の円筒状のもので中心部に最大径を持ち、両端部が細い。言うまでもなく漁網のおもりであり一括して出土した。出土位置が発掘区の限界置であることから未掘地になおも一括遺物があるものと考えられる。

**玩具** (202) オハジキである。厚さ4mm、最大径17mmの土師質の焼きものである。表面に魚形らしい形の張土がある。

**羽口** (203) 鍛冶が(火床)の通風管の先端部分である。203の他に細片が1点検出されている。203も小片だが推定直径60mm、内径30mm程である。先端が内外共にすばまり、内径は先端部で26mmである。両者共先端部にガラス状のスラグが癒着している。

### 4) その他

**井戸側** (図版17、209) 巨木の削り抜きによる筒状のものである。この遺物に関しては前章の井戸遺構で記述したのでここでは省略する。また井戸枠と考えられる板材についても同様である。

**木製品** 図示しなかったが曲物の底板と推定される板がある。井戸内覆土での検出である。長さ120mm、短径100mm、厚さ8mmの杉材である。

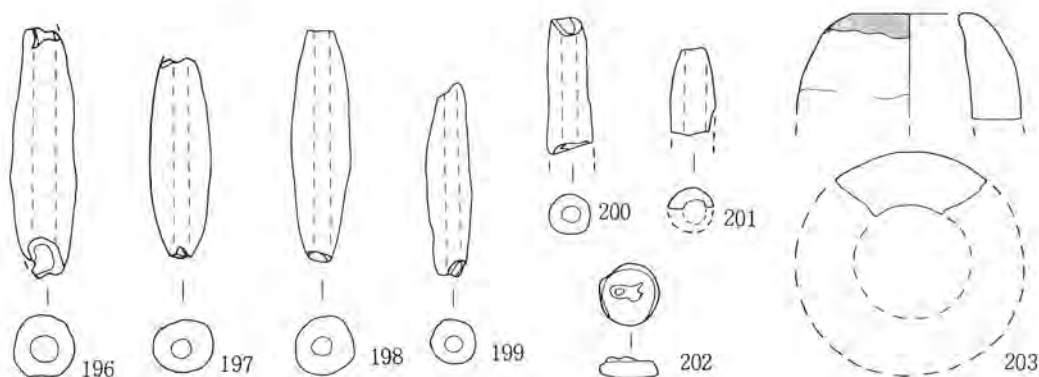
**種子類** 井戸遺構内より4種類の種子類が検出されている。これらは専門的調査に至っていないが、次のものである。

**ウリ科の種子** (図版18-205) 種別を断定出来ないがウリ科の種子で、長軸4mm、短軸2.5mmのもので、479粒が一括している。出土状況から1個体のものと推定しているが確証はない。

**山椒の種子** (図版18-206) 直径3～4mmの小粒の円形種子である。14粒が一括出土した。

**桃の種子** (図版18-207) 長軸24mm、短軸15mmを測るほど同計の2個の種子である。

**クルミ** (図版18-208) 外皮のみの破損物であるがクルミと推定出来る。推測の域を出ないが、オニグルミであろう。



第20図 土製品1/2

縄 文 土 器

挿図 NO	遺物 NO	出土区域	器 種	計 測			造 り	胎 土	焼 成	色	備 考
				高さ	口径	底径					
1	9	A-B-7	深鉢				縄文	砂質	良	赤褐色	前期後葉、口縁部
2	7	A-B-8	"				" 器内ミガキカ	密	"	赤茶色	"
3	8	A-B-10	"				"	砂質	不	灰白色	"
4	6	A-井戸	"				"	"	良	赤茶色	"
5	1	A-B-7	"				竹管文	密	"	灰白色	中期
6	2	A-B-10	"				"	"	"	"	"
7	5	A-B-7	"				燕糸文	砂質、雲母	"	茶 色	"
8	4	D-C-21	"				縄文	"	中	灰白色	"
9	57	A-B-8	"				平行線文	密	良	焦茶色 薄茶色	時期不明

弥 生 土 器

挿図 NO	遺物 NO	出土区域	器 種	計 測 (mm)			造 り		胎 土	焼 成	色	備 考
				高さ	口径	底径	内	外				
10	26	A-C-7	壺		200		ハケメ	ハケメ	石英粗粒	良	焦茶色	口唇部内外に隆圧痕紋
11	23	A-SE1	"		160		ハケメ、ナデ	"	石英粒	"	茶 色	"
12	31	A-C-9	"		150		ハケメ	" ヨコナデ	石英粗粒	"	暗褐色	羽状隆圧痕紋
13	35	A-C-17	"				"	"	岩石粒少	"	薄茶色	"
14	38	A-C-9	"		100		ナデ	頸部に沈線	長石粗粒	中	赤褐色	"
15	75	A-B-7	"		160		ハケメ	ハケメ	石英荒粒多	良	茶 色	" 只殻紋カ
16	39	A-C-9	"				"	"	石英粒多	"	黒 色	器内灰色 櫛描・波状・縞状紋
17	40	A-T2	"				"	"	"	"	"	同上 同一個体カ
18	220	A-CT	"				ハケメ	ハケメ	石英、長石粒	"	薄茶色	帯状張土
19	221	A-B-8	"				"	"	長石微粒	"	黄白色	斜格子紋の帯状張土の剝離片
20	51	A	"				ハケメ	ハケメ	石英微粒	"	黄茶色	櫛描縞状紋、刺突紋
21	44	A-C-9	"				ハケメ	"	石英細粒	"	黄白色	櫛描紋
22	58	"	"				ハケメ	"	密 "	"	焦茶色	器内灰色
23	90	A	"				"	"	石英粗粒	"	黒 色	器内薄茶色、櫛描紋
24	42	A	"				ハケメ	"	微砂粒少	不	"	櫛描流水紋
25	41	A-C-7	"				"	ハケメ	" "	良	茶 色	波状紋
26	91	A-A-4	"				ハケメ	"	石英雲母細粒	中	黄白色	櫛描紋
27	59	"	"				ハケメ	"	石英細粒	不	黄茶色	櫛描紋カ
28	67	A-SE1	"				"	"	石英粗粒	良	薄黒茶色	櫛描紋、ボタン付
29	46	A	"				"	"	石英粒	"	灰 色	櫛描紋
30	50	A	"				"	"	微砂粒多	"	灰茶色	"
31	48	A-C-10	"				"	ナデ	石英、雲母粒多	"	薄茶色	"
32	49	A	"				"	"	長石、石英微粒	"	黒 色	"
33	47	A-C-7	"				"	"	石英粗粒多	中	薄茶色	"
34	60	A	"				ハケメ	斜行	"	"	黄茶色	"
35	92	A	"				ナデ	タタキ	微砂粒	良	茶 色	"
36	62	A-T	"				"	"	石英、雲母、微砂	"	焦茶色	器内灰色 櫛描
37	61	A-C-9	"				"	"	" "	"	"	器内灰色 "
38	63	A	"				"	"	" "	"	"	"
39	88	A	"				"	"	石英微砂粒	中	薄茶色	"
40	89	"	"				"	"	微砂粒少	良	茶 色	"
41	95	A	"				ナデ	"	砂質	"	黄茶色	擬縄文
42	45	A-B-7	カメ				"	ハケメ	石英粒多	"	茶 色	3本櫛歯の刺突紋
43	52	A-T埋土	"				"	"	" "	"	黄茶色	突帯紋
44	53	A-B-5	"				ヨコナデ	ヨコナデ	石英粗粒多	中	"	"
45	56	A	"				ハケメ	ハケメ	砂粒多	"	白茶色	圧痕紋

種別 NO	遺物 NO	出土区域	器種	計測 (mm)			造り		胎土	焼成	色	備考
				高さ	口径	底径	内	外				
46	36	A-C-7	カメ				ハケメ	ハケメ	岩石粒	良	暗灰色	圧痕紋
47	29	D	"		(200)		ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ヨコナデ	微砂粒多	不	薄茶色	器内黄白色 圧痕紋
48	30	A-A-5	"				"	"	岩石粒多	"	"	"
49	27	A-C-8	"				ハケメ	ヨコナデ	岩石粒	"	黄白色	"
50	235	A-DT	"						砂粒	"	薄茶色	圧痕紋
51	33	A	"							"	黄白色	磨耗激しい
52	34	A	"						石英粗粒	"	茶色	"
53	32	A	"						細砂粒	中	黄白色	"
54	43	A-C-20	"					ヨコナデ	石英粗粒	不	黄茶色	櫛描紋
55	78	A-A-5	"	(260)			ハケメ	ハケメ	微砂粒	"	"	"
56	55	A-A-4	"				"	"	石英、長石粒多	中	"	"
57	37	A	"				"	"	石英粗大粒	"	黒色	器内一部に炭化物付着
58	85	A	"				"	ナデ	石英粒少	中	薄茶色	"
59	74	A-B-7	"				"	ハケメ	石英雲母細粒	"	白茶色	器内薄茶
60	79	A-A-5	"	(210)			"	"	石英微粒	良	薄茶色	器内黒色
61	77	A-B-7	"	(150)			"	ナデ	砂粒	"	茶色	"
62	83	A	"				"	ハケメ	石英雲母細粒	"	灰茶色	"
63	86	A	"				"	ナデ	微砂粒	中	黄茶色	一部炭化物付着
64	82	A-C-8	"				"	ハケメ、ナデ	"	"	黄土色	"
65	81	A-A-5	"				ヨコナデ	"	石英細粒	中	赤茶色	"
66	84	A	"				ナデ	ナデ	石英微粒	良	黄茶色	肉薄
67	25	A-B-8	"	180			ハケメ、ナデ	ハケメ	砂粒少	中	焦茶色	圧痕紋
68	24	A-C-7	"	200			"	ハケメ	石英粒	"	"	器内顔料塗付
69	54	A	"	184			"	ナデ	粗砂粒	良	薄茶色	器内灰色 圧痕紋
70	236	A-C-12	"	242			"	ナデ	石英粗粒多	中	黄白色	"
71	234	A-C-9	"	200			"	ヨコナデ	石英粗粒多	良	黄茶色	"
72	93	A-A-2	"	160			ヘラ ナデ	ナデ、ハケメ	石英長石雲母粒	"	茶色	"
73	229	A-C-8	"	150			"	ハケメ	石英金雲母粒	"	黄茶色	器外一部炭化物付着
74	232	A-C-8	"	150			"	"	石英雲母粒	"	黒色	"
75	72	A-B-7	"				ナデ	ナデ	長石、石英粒多	"	黒色	口縁部に器内外に張土
76	71	A	"	142			"	"	石英荒粒	"	白茶色	口縁に炭化物付着
77	73	A-C-9	"				"	ヨコナデ	岩石粒	"	茶色	口縁内炭化物付着
78	233	A-A-5	"	170			ハケメ	"	石英細粒	"	灰色	器内暗灰色
79	231	A-B-9	"	200			"	ハケメ、ナデ	石英粗粒多	不	黄茶色	器調整
80	76	"	"				"	ヨコナデカ	石英雲母多量	中	薄茶色	口唇部黒色
81	68	A	"				"	手づくね	石英粗粒多	良	"	器内黄茶色 指押痕
82	80	A-B-8	"	120			"	ハケメ	石英細粒多	不	"	"
83	69	A-C-8	"	150			ハケメ	ナデ	石英粗粒多	良	焦茶色	口唇部
84	226	A-A-4・5 A-B-7	"	210			ナデ	ハケメ	石英粗粒	"	"	器内薄茶色
85	228	A-A-4	"				ハケメ	ハケメ	石英粗粒	良	黒色	84と同一カ
86	70	A-A-4	"	220			"	ナデ	石英金雲母	"	赤茶色	器外面化粧土
87	223 ~225	"	"	(300)	300		"	ナデ、ハケメ	石英長石多	"	黄茶色	丸底
88	219	A-A-5	"				"	"	砂粒	不	赤茶色	磨耗
89	214	A-C-8	"				"	"	石英粗粒	良	黄土色	"
90	220	A-B-8	"				"	"	石英微粒、砂粒	不	"	"
91	212	A-B-8	"				ハケメ	"	石英微粒、	良	明褐色	"
92	201	A-C-9	"				ハケメ	"	石英粗粒	不	黄白色	"
93	206	A-B-8	"				"	ハケメ	雲母微粒	良	茶褐色	"
94	210	A-A-4	"				"	ヘラ	石英、長石、砂粒	"	褐色	"
95	207	A-A-4	"				"	"	石英微粒、砂粒	"	黄土色	"
96	222	A-A-5	"	70			"	ナデ	石英粒多	不	白茶色	"
97	227	A-A-4	"				ハケメ	ハケメ	石英粒	良	赤茶色	丸底
98	94	A-C-8	"		96		"	"	岩石、石英	"	黄茶色	器内赤茶色
99	230	A-C-10	"	70			"	ハケメ、ミガキ	砂粒	中	焦茶色	器内黄土色
100	5	A-C-10	底部		66		"	ハケメ、ハケメ	石英粒	不	赤茶色	"
101	3	A	"		100		ハケメ	ハケメ	雑	良	薄茶色	表面風化
102	12	A-C-8	"		60		"	ヘラミガキ	石英粒	"	"	"
103	2	A-A-4 A-B-7	"		65		"	ハケメ、ミガキ	密	中	白茶色	器外面底部共にミガキ

種目 NO	遺物 NO	出土区域	器種	計測(mm)			造り		胎土	焼成	色	備考
				高さ	口径	底径	内	外				
104	11	A	底部			60		ハケミミガキ	石英粗粒	中	焦茶色	
105	9	A-B-10	"			66	ミガキ	ハケメ	石英粒砂粒	良	薄茶色	
106	10	A-B-7	"			70		ヘラミガキ	石英粒	"	暗褐色	器内黄茶色
107	8	A-C-7	"			62		"	石英粒多	"	黄白色	底部ミガキ上げ
108	14	A-B-7	"			75		ハケメヘラミガキ	石英、長石、雲母	"	白茶色	底部黒色
109	15	A-B-7	"			66		"	石英荒粒多	"	薄茶色	器外面に化粧土
110	21	A-B-8	"			62	ハケメ	ハケミミガキ	石英粗粒多、雲母	良	白茶色	化粧土
111	13	A	"			78		"	密	"	黒色	
112	19	A-C-9	"			91	ヘラミガキ	ヘラミガキ	石英荒粒多	"	薄茶色	器内灰色、底部ミガキ
113	4	A-B-T	"			100		ハケメ	石英粗粒多	中	白茶色	
114	1	A-A-T	"			76	ハケメ	* (ハケミミガキ)	石英粗粒	良	薄茶色	底部剥脱
115	17	A-B-7	"			60		ハケメ	長石、石英荒粒	"	茶色	器内黒色
116	16	A-SE1	"			54	ハケメ	ハケメヘラミガキ	石英荒粒	"	黄茶色	"
117	20	A	"			60	"	* (ハケミミガキ)	石英粗粒多	中	薄茶色	
118	18	A-C-9	甌			80	"	"	石英荒粒少	良	茶色	底部ミガキ上げ
119	22	A-A-5	器台					* ヨコナ	石英砂粒多	"	"	器内、底内共に化粧土
120	64	A-A-5	"				指押圧	ナデ面取り	微砂粒	"	赤茶色	

## 石 器

種目 NO	遺物 NO	出土区域	器種	計測(mm)			備考
				長さ	巾		
121			スクレーパー	26	17		
122			スリ石	79	59	自然石	
123			"	79	62		
			フレーク			16点	

## 土 師 器

種目 NO	遺物 NO	出土区域	器種	計測(mm)			造り		胎土	焼成	色	備考
				高さ	口径	底径	内	外				
124	H30	A-C-9	カメ		(250)		ハケメ	ハケメ	石英長石粒	不	明黄色	炭化物付着
125	"10	A-B-11	"		(182)		"	"	密	良	褐色	
126	"9	A-B-10	"		(140)		"	"	石英細粒	"	黄褐色	炭化物付着
127	"6	A-C-7	"				"	"	長石細粒密	不	明褐色	
128	"8	A-C-9	"						長石微粒	"	明黄色	頸部に沈線廻る
129	"7	A-B-11	"						長石粒	良	黄土色	
130	"32	A-B-8 A-C-8	"			(66)	ハケメ	ナデ	石英、長石、雲母	不	黄白色	
131	"25	A-C-9	"			(56)	"	"	石英粗粒	良	赤茶色	底部に張土
132	"26	A-B-11	"			(65)	ナデ	"	密	"	黄土色	
133	"27	A-B-10	"			(58)	"	糸切	"	不	"	
134	"5	A-B-10	ナベ				ハケメ	ハケメ	長石、石英粗粒多	良	"	
135	"28	A-C-7	"				"	"	密、長石細粒	不	"	
136	"31	A-C-12	"				ナデ	"	密	"	灰白色	
137	"29	A-B-8	カメ				"	ハケメ	"	"	黄土色	
138	"16	A-B-10	"				糸線	タタキ	"	"	"	
139	"13	A-B-10	"				"	"	"	良	褐色	炭化物付着
140	"11	A-A-2	"				"	"	"	"	明黄色	炭化物付着
141	"24	A-B-7	"				"	"	砂質	"	褐色	
142	"18	A-B-9	"				ハケメ	青海波	石英雲母	不	明黄色	
143	"19	A-C-8	"				青海波	タタキ	長石粒	良	明褐色	
144	"20	A-C-12	"				"	"	"、砂質	"	黄土色	
145	"12	A-B-7	"				ハケメ	青海波	長石、石英粒	"	褐色	

種図 NO	遺物 NO	出土区域	器種	計 測 (mm)			造 り		胎 土	焼 成	色	備 考
				高 さ	口 径	底 径	内	外				
146	H17	A-B-19	カメ				ハケメ 青海波	タタキ	石英雲母	不	褐色	
147	"33	A-C-8	坏	37	(200)	(140)			石英荒粒	良	丹塗	器内外に顔料塗
148	"	A-A-7	"	35	140	86			長石粒	不	"	器外に顔料塗 胎土剥離
149	"2	A-C-10	"			80			石英、長石細粒	"	黄土色	
150	"3	A-B-11	"			72			石英粒	良	"	
151	"4	A-C-11	"			60	ミガキ		密	"	"	内黒

### 須 恵 器

種図 NO	遺物 NO	出土区域	器種	計 測 (mm)			造 り		胎 土	焼 成	色	備 考
				高 さ	口 径	底 径	内	外				
152	S24	A-B-10	鉢		(274)		ハケメ 青海波	ハケメ タタキ	密、長石、石英細粒	不	灰色	把手付
153	22	A-B-10	"				ナデ	ナデ	密	"	"	"
154	21	A	"				青海波	タタキ	"	"	暗灰色	153と同一個体
155	16	A-B-11	双耳壺		(108)		"	ハケメナデ	長石粒	良	黒灰色 灰色	
156	19	A-B-8	瓶				ハケメ	ナデ	"	"	灰色	
157	20	A	"				ナデ	"	密	"	"	自然釉
158	18	A-B-5	"				"	"	"	"	"	"
159	17	A-C-18	短頸壺		(132)		"	ハケメ	長石、石英細粒	"	"	"
160	26	A-C-18	横 瓶				青海波	"	長石細粒	"	黒灰色	
161	50	D	"				ハケメ	"	" 石英	"	灰色	
162	27	A-C-18	"				青海波	"	密	"	黒灰色	自然釉
163	25	A-C-18	"				"	"	長石細粒	"	暗灰色	
164	1	A-B-10	広口壺		(44)				密長石微粒	"	"	口縁部 歯状紋 自然釉
165	2	A-T埋土	"						" "	"	"	" " "
166	3	A-B-9	"						" "	"	"	" " "
167	4	A-B-10	"				青海波	ナデ	"	"	"	頸部
168	5	A-C-12	"				"	タタキ	" 石英細粒	"	白灰色	
169	6	A-C-9	"				"	タタキ	"	"	暗灰色	器内剥離
170	7	A-B-8 A-C-9	"				"	ハケメタタキ	石英粒	良	黄土色	
171	47	A-C-12	坏 蓋		(170)				密	不	白色	
172	44	A-B-4	"		158				長石荒粒	良	灰色	
173	43	A-A-4	"		162				密	"	暗灰色	器内外にスス
174	45	A-B-8	"		154				石英微粒	"	白灰色	
175	46	A-A-2	"						密 雲母	"	灰色	
176	48	SE1	坏	35	136	100			"	不	"	器内外共にアバタ状に剥離
177	36	A-C-12	"		90		底部ナデ		密長石荒粒	良	灰色	
178	37	A-C-7	"	37	130	90	ヘラオコシ	ナデ	長石粒	"	"	
179	240	A-C-12	"		70		左クロ		長石、石英細粒	不	黄土色	
180	241	A-C-12	"		72		底部ナデ		石英粒砂粒	良	暗灰色	
181	40	A-C-12	"	35	130	90	"		石英荒粒	"	灰色	
182	41	A-C-10	"		84		ヘラオコシ		密	"	暗灰色	
183	245	A-C-12	"		(80)		底部ナデ		石英荒粒	"	白灰色	
184	244	A-C-11	"		84		ヘラオコシ	ナデ	" 雲母	"	黄土色	
185	42	A-B-5	"		86				砂質	不	白灰色	
186	39	A-C-9	"	36	130	84	底部ナデ		長石粒	良	"	
187	38	A-C-12	"	30	134	86			長石石英細粒	"	灰色	
188	242	A-B-5	"		86				石英粒砂粒	"	"	
189	243	A-B-9	"		76		ヘラオコシ		石英微粒	"	"	
190	32	A-C-12	有台坏	43	150	88			石英細粒	不	白灰色	高台剥離
191	34	A	"		88				密石英微粒	良	黒灰色	



挿図 NO	遺物 NO	出土区域	器種	計 測 (mm)			造 り		胎 土	焼 成	色	備 考
				高 さ	口 径	底 径	内	外				
192	S30	A-C-12	有台坏	46	138	88			石英長石粒	不	白灰色	
193	"33	A-C-12	碗			100			密石英粒	良	暗灰色	
194	"35	A-B-7	"			88			石英粒	"	灰 色	
195	"31	A-C-12	"	73	154	98	腰部ヘラケズリ		密	不	白灰色	

### その他の土製品

挿図 NO	遺物 NO	出土区域	器種	計 測 (mm)			造 り	胎 土	焼 成	色	備 考
				長 さ	口 径	外 径					
196	1	A-C-9	土 錘	65	5	17		密	良	赤茶色	
197	2	A-C-9	"	53	4	16		"	"	"	
198	3	A-C-9	"	62	4	16		"	"	"	
199	4	A-C-9	"	36	4	12		"	"	"	半欠
200	5	A-C-10	"	52	4	12		"	"	"	
201	6	A-C-9	"	23	6	12		"	"	"	半欠
202		A-B-7	オハジキ	(16×17)				"	"	"	
203		A-C-11	羽 口		(30)	61		粗			破片
204		"	"								" (細片)

### その他の出土遺物

挿図 NO	遺物 NO	出土区域		(mm)	
205		A-SE1	種子類	ウリ科の種子	4×2.5 479粒
206		"	"	山椒の種子	φ3~4 14粒
207		"	"	桃の種子	24×15 2ヶ
208		"	"	クルミ	1ヶ
209		"	木製品	井戸側	

## IV ま と め

### 1. 各時代の遺物について

#### A 縄文時代の遺物

前章で報告した9点の縄文土器片が検出された全てである。これらの土器が縄文時代の前期後葉に位置づけられるものと、中期のものに分けられることはすでに報告した。これらの土器片の多くは客土や、攪乱層からの出土であるが、No.4の1点は古代の井戸内よりの出土である。このことから縄文遺跡がここに存在していたことを明らかに物語るものであり、周辺遺跡からの流入物でないことが明らかである。したがって南側に隣接していたと考えられていた前郷遺跡はあるいは広大なひろがり呈していた可能性が推測される。

#### B 弥生時代の遺跡

当遺跡が地質学上の日本海新砂丘I-2と呼ばれているこの地域で確認されている内では、最も内陸部に位置する砂丘の上にある。また調査部分が砂丘の端部であり、その裾が約20度の角度をもって地中に深く落ち込んでいく斜面に位置していたこと、また一部分の高地部は過去による

土砂採集事業による攪乱層などであったため、弥生時代の遺構を見ることは出来なかった。

出土遺物は攪乱層での出土が多かったが、総数1,985点の細片がある。この内口縁部片35、底部19、胴部1,617点が識別された。これらは壺、甕を主とするが甕が多い。弥生土器の甕はいうまでもなく煮沸と言う用途が優先されたものである。

これらの土器はすでに報告した如くいくつかの系統で構成されている。いわゆる畿内系の楠描紋系土器、北陸系の小松式土器（石川県）、北関東系の二ツ釜式土器（茨城県）、東北系の南御山Ⅱ式土器などである。県内に於る弥生土器編年はその遺跡数から見ても盛観とはいえ、確たるものを知らないが、中期初頭に位置付けられている緒立遺跡、猫山遺跡から六ノ瀬遺跡、下谷地遺跡、山草荷遺跡、六地山遺跡、そして弥生最終末期の千種遺跡などがある。このような中で当遺跡が営まれた時期は、前述の土器型式から弥生中期後葉にその主体を置くものであろう。

当遺跡を長年に亘って視続けて来られた酒井和男氏から、榊形Ⅳ式土器の出土もあると教えられている。榊形Ⅳ式土器（宮城県）は南御山Ⅱ式土器に平行するもので、時期的な変動を見るものではない。

ところで弥生時代はおよそ前3世紀頃から、後3世紀の終末頃にかけて継続したと考えられている。この時代は水稲耕作に基づく完全な農耕社会が形成された時代である。そして弥生中期は前100年、後100年とみなされている。この頃、この砂丘の前面を流れる阿賀野川は、どのような自然環境を作り出していたものであろうか。

### C 古代の遺跡

土師器、須恵器が出土するのは歴史時代である。この時代の遺構として井戸遺構がある。井戸は砂丘の端部にあり、河川の存在も窺われた。井戸は古代の様式を呈する巨木の刳抜き井戸側で、井戸内より土師器の壺No.11、須恵器環No.176が検出しており、時代的には動かない。古代の井戸には丸太、曲物などの井戸側を複数重ねたものがあるが、ここでは単一のものであった。又井戸の廃棄に当っては応々にして何等かの祀事をするものがあるが、それらも一切見られないものであった。

土師器は言うまでもなく弥生土器の流れを汲む赤焼きの土器であるが、前代（古墳時代）の土師器とは製作の面で異なり、ここで言う土師器とはロクロによって成形されたもので、須恵器と平行して使用される。一方須恵器は大陸からもたらされた技術による焼物で、硬く焼き締められたものである。土師器に比して耐水性に強いが火熱に弱い。この様な性質から土師器は煮沸用具の甕、鍋と食膳具の環類があり、須恵器は貯蔵具の壺、瓶と食膳具の環、碗類がある。

土師器は出土総数106点で識別出来るもの、環5、鍋3の他は甕類である。前述した如く甕類の多くは煮沸に使用され、炭化物の付着するものが多い。須恵器は総数161点の出土がある。この内環類70、環蓋5、碗3、鉢2、瓶7、その他は壺類である。

これらの土器から見られる遺跡の年代推定は、個体数の少なさから限定することは出来ないが、ここで言えることはおおよそ次の様な目安にしたいと考える。土師器の内、甕類の口縁形態、及び環類が須恵器の環の形態に同じであること、そして9世紀初頭には主流となるやぶ碗形に近い

坏や、小型甕が全く見られないことが指摘出来る。一方須恵器では坏類の多くが丸味を帯び、鉢、壺の形態が、貝屋窯址の遺物の形態に極似している。また沈線を有する碗も貝屋窯址及び山崎窯址のものに類似している。以上のことから当遺跡の古代に関しては、その上限を8世紀中葉に考えるが、下限は現在の資料からは8世紀を降るものではないと考えられる。

## 2. おわりに

当発掘調査は道路改良に伴う緊急調査にもかかわらず、単に調査担当者の不在、多忙が理由で長期間に亘って保留されていたことは、担当者の一人として残念であった。またこの事実によって多くの関係機関はもとより地元の方々及び多くの方々が不快を感じたであろうことを考えると遺憾に思う。

日本の台地は1,000年に2～3mの隆起が進んでいたと言われている。弥生時代はさておき、8世紀には日本海は現在の海岸線まで後退していたはずであるが、当遺跡周辺の低湿地はいかなる環境の基にあったか想像しがたい。ふた昔前までは考えられなかった新潟平野の微高地に、近年古代の遺跡がぞくぞくと発見されている。弥生時代に農耕と共に人口増加が見られたと言われている如く、古代に於ても爆発的な人口増加が見られたと言われている。山ん家遺跡の性格は不明だが、いつの日か何等かの手掛りが得られれば幸いである。

現地調査も整理作業も限られた時間の中でのものであった。したがって何彼といたらない点が多いことを承知している。当調査で公私に亘って御指導、御援助を賜われた多くの方々へお礼申し上げます。

1993. 2. 11

川上 貞雄

## 参 考 文 献

- 酒井 和男ほか 『大江山地区の遺跡』 1987 新潟市教育委員会  
家田順一郎 『小丸山遺跡』 1986 横越村教育委員会  
鈴木 郁夫 『阿賀野川と新潟平野』 『新津市史』(資料編1) 1989 新津市  
金関 怒ほか編 『弥生文化の研究3』 1986 雄山閣出版  
金子 拓男ほか 『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書、下谷地遺跡』 1979 新潟県  
教育委員会  
中村 五郎ほか 『山草荷2式土器について』 『信濃』通巻第249号 1970 信濃史学会  
会津若松市教育委員会編 『東日本における古代・中世窯業の諸問題』 1992  
拙著 『貝屋須恵窯址』 1982 加治川村教育委員会





1



2



3

1. 調査区全景

2. 同 上

3. 調査区部分



1



2



3

1. A区調査風景

2. A区B・C16~19調査風景

3. A区調査風景



1. A区上層調査完掘      2. A区B・C 6～8 付近完掘  
3. A区B・C 3～7 付近完掘

图版 4



1



2



3

1. D区 B·C21~26完掘  
3. D区 B34~36完掘

2. D区 B·C29~32完掘





1



2



3



4

1. A区 B・C12~13完掘  
3. 同上溝状遺構

2. A区 B・C17~19完掘  
4. 同上



1



2

1. 下層調査トレンチ (手前よりA・B・C・D)  
2. Bトレンチ



1



2



3

1. 1号井戸 (井戸側発掘前)

2. 1号井戸側内完掘

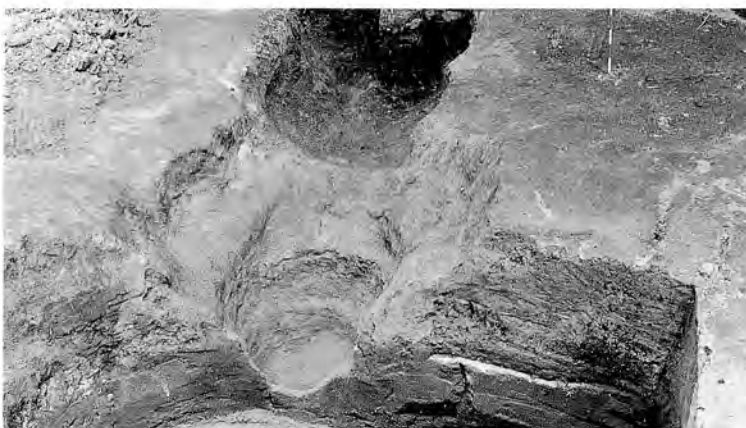
3. 1号井戸 (井戸側出土)



1

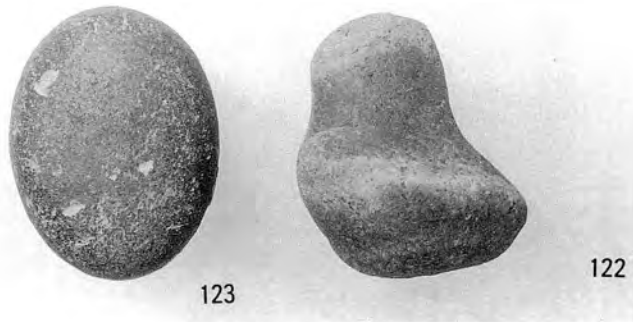
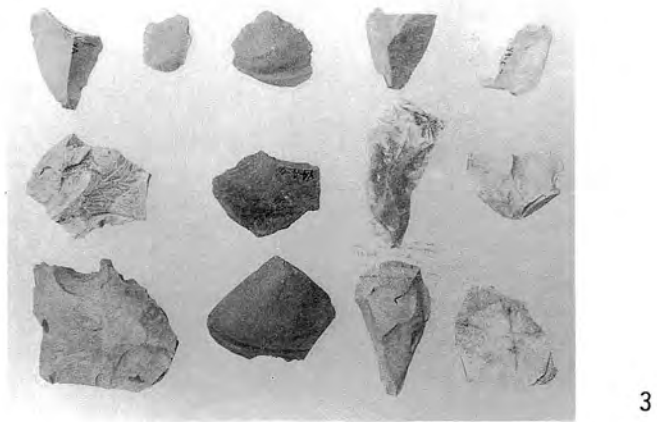
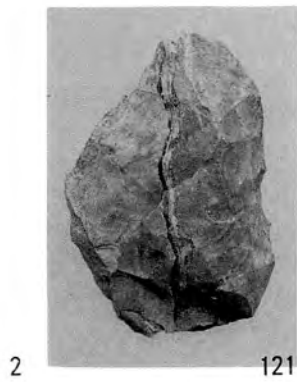
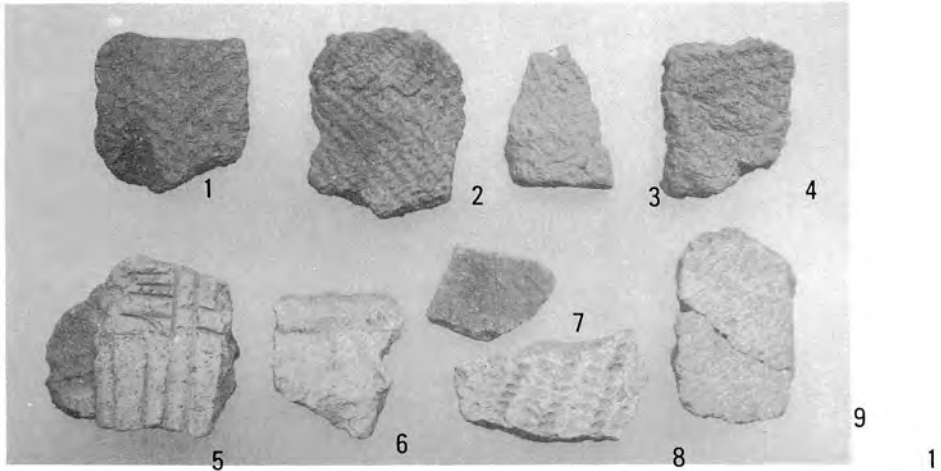


2



3

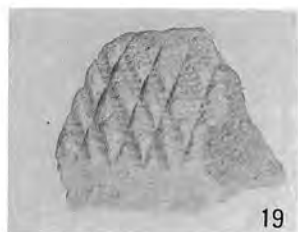
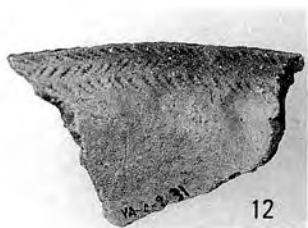
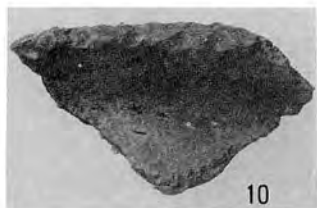
1. 1号井戸、2号井戸切合点      2. 2号井戸完掘  
3. 2号井戸完掘（1号井戸内より）



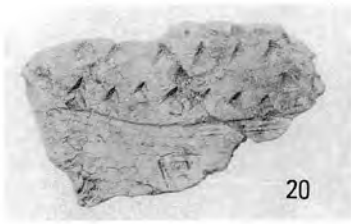
1~9. 縄文土器  
122. 123. スリ石

121. 不定形スクレーパー  
その他フレイク

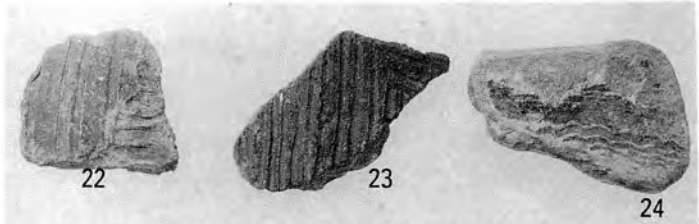
図版10



弥生土器 ツボ類



20



22

23

24



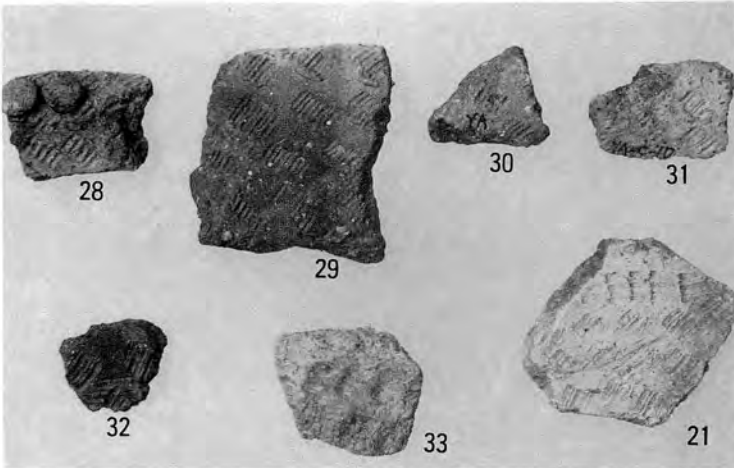
34



25

27

26



28

29

30

31

32

33

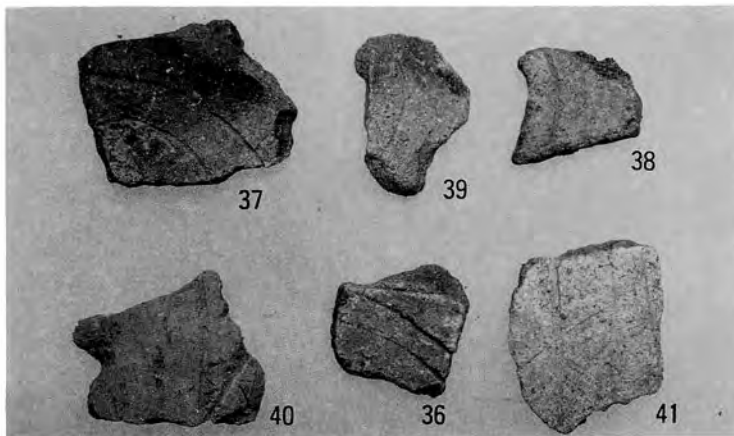
21



35



42



37

38

39

40

36

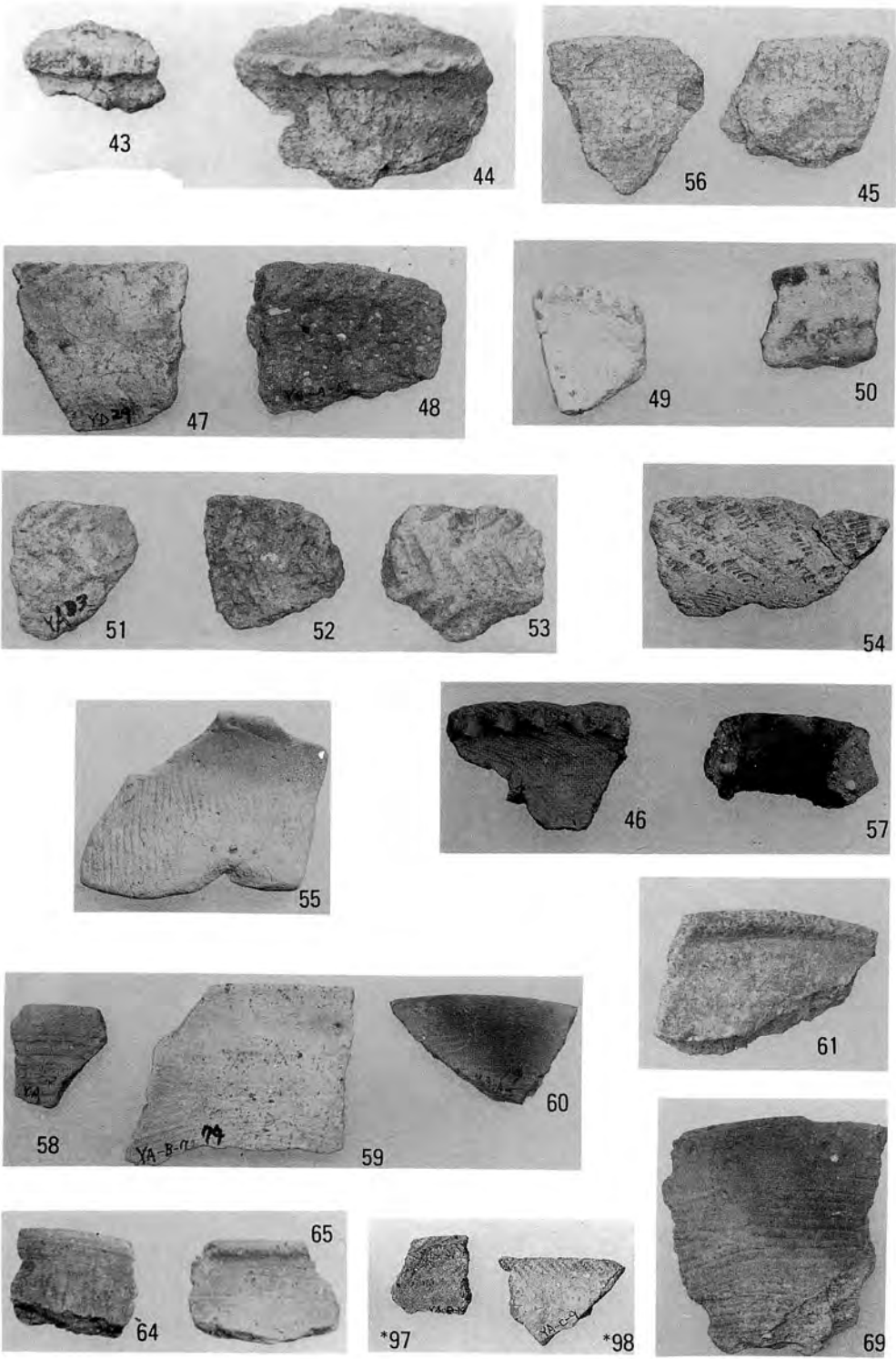
41



95  
YA-B-7

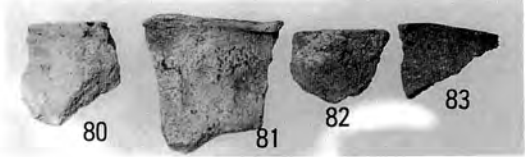
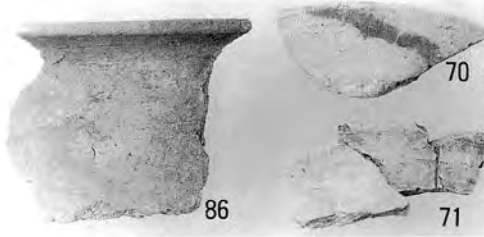
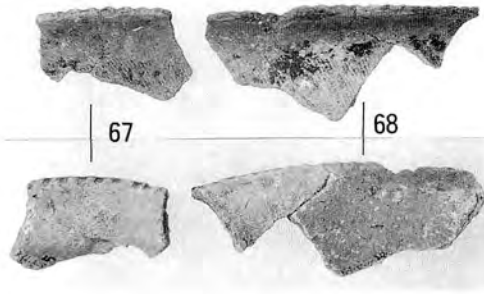
弥生土器 ツボ類

図版12



弥生土器 カメラ類





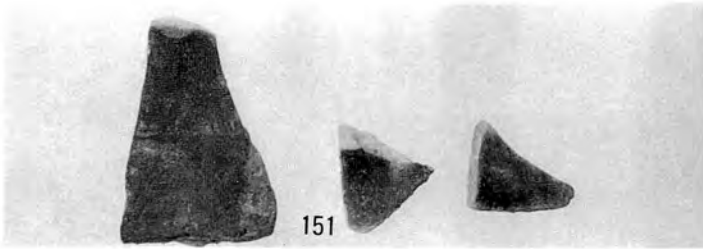
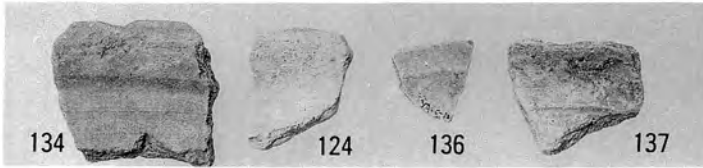
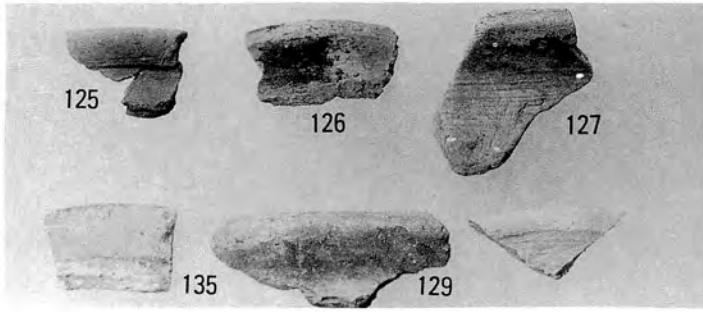
弥生土器

カメ類



弥生土器  
118. 甕

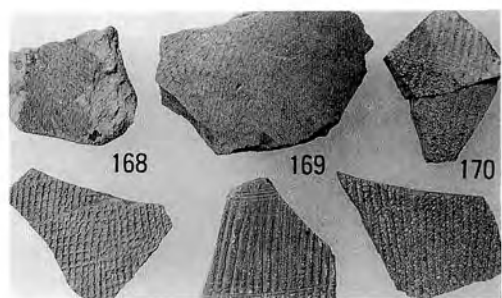
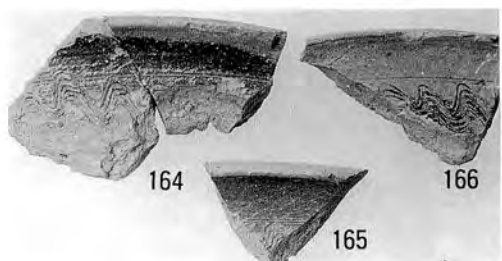
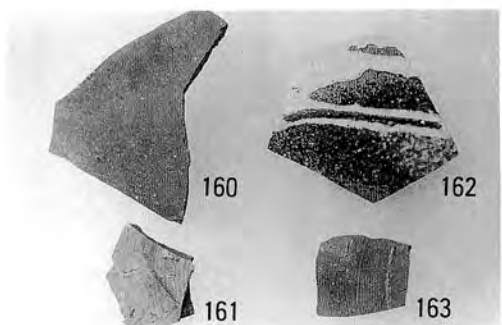
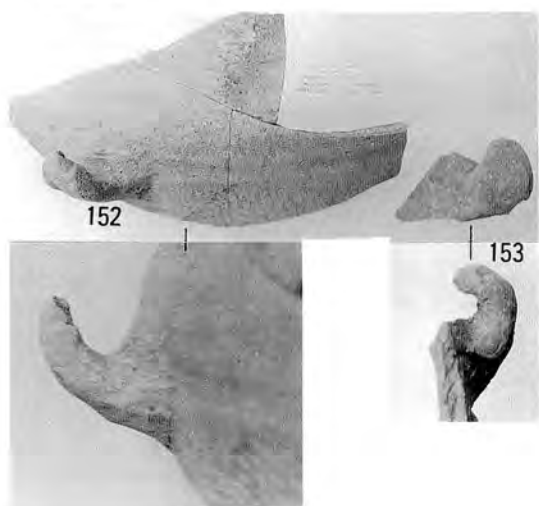
底部  
119. 器台



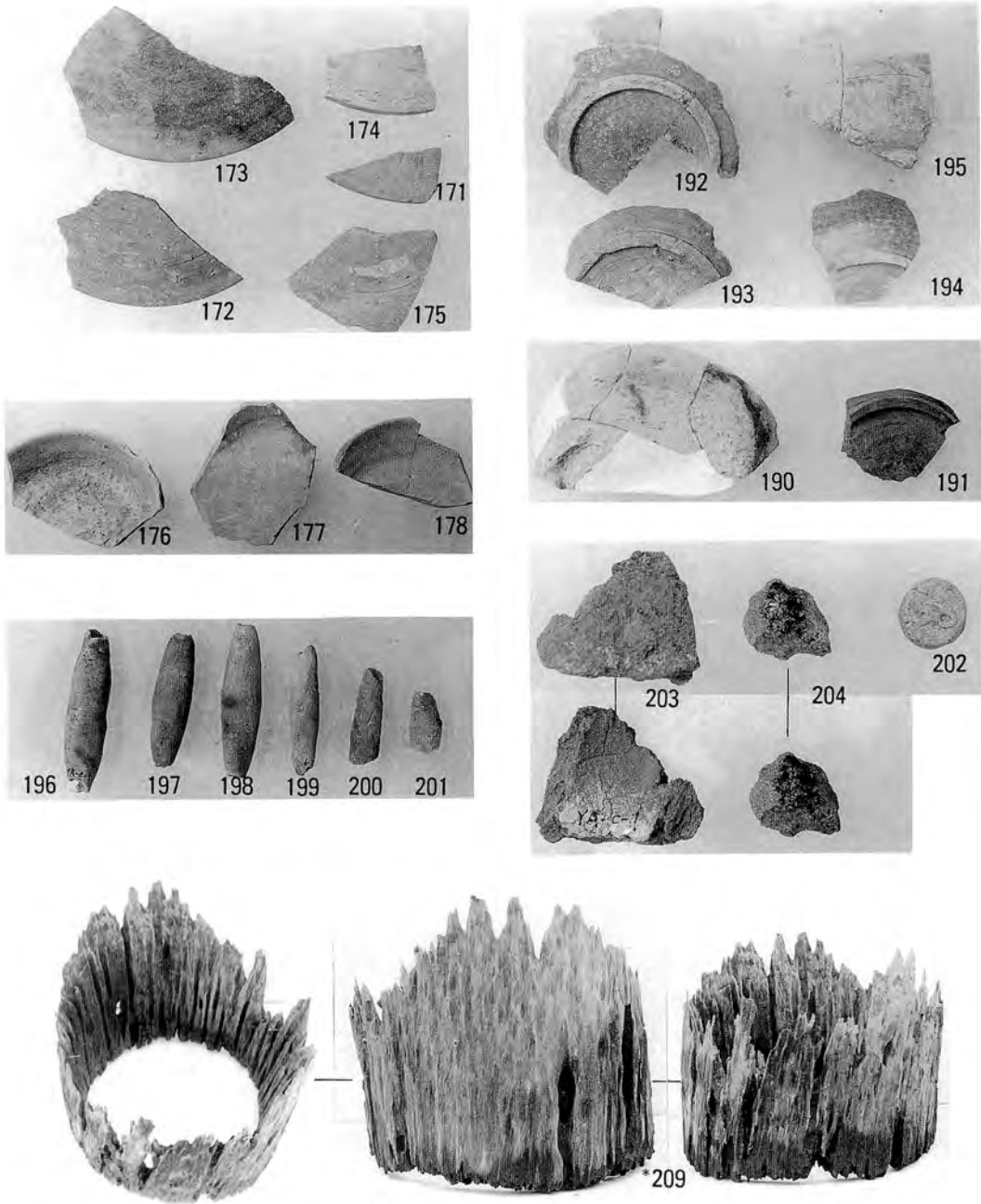
土師器

カメ類 坏

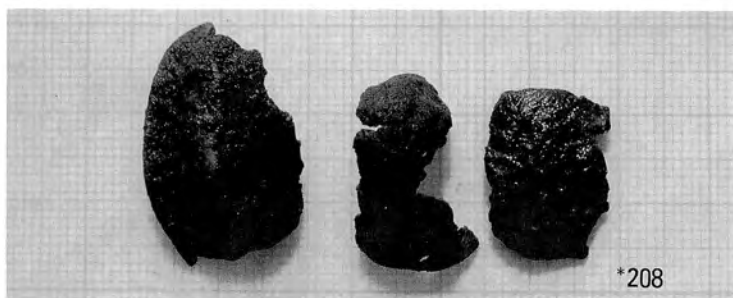
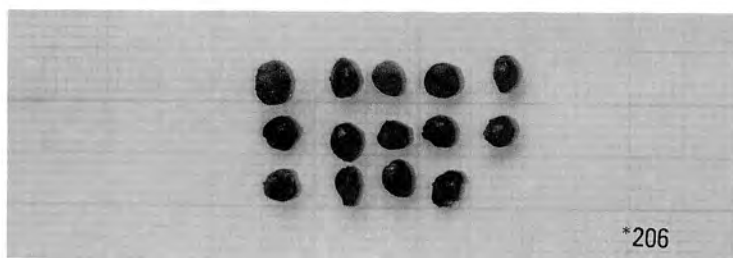
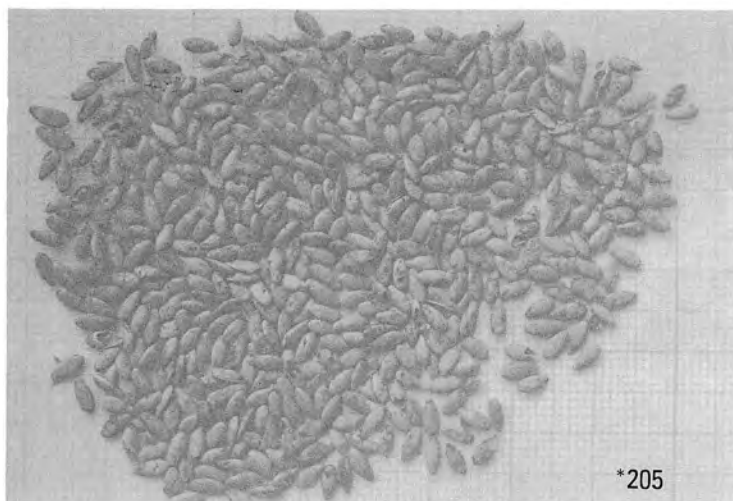
図版16



須恵器 肥手付ツボ 耳付ツボ ツボ類



須恵器 171~191  
196~201.土錘 203.204.羽口 202.おはじき 209.井戸側



種子類

205. ウリ科    206. サンショ    208. クルミ    207. モモ

横越村文化財調査報告②

ヤマシチ  
山ん家遺跡

緊急発掘調査報告書

1993年2月20日 印刷

1993年2月28日 発行

発行 横越村教育委員会  
新潟県中蒲原郡横越村横越4710番地  
TEL (025) 385-2111

印刷 有限会社 亀田プリント社  
新潟県中蒲原郡亀田町亀田工業団地2番8号  
TEL (025) 382-4601(代)